源氏物語

さわらひ
やとりき

醍

第百四十一函

太政官文庫
和
三二

内閣文庫
番號 和 32334
冊數 30（21）
函號 202 353

内閣文庫
和書 類
號
冊
架

202-353
(21-30)

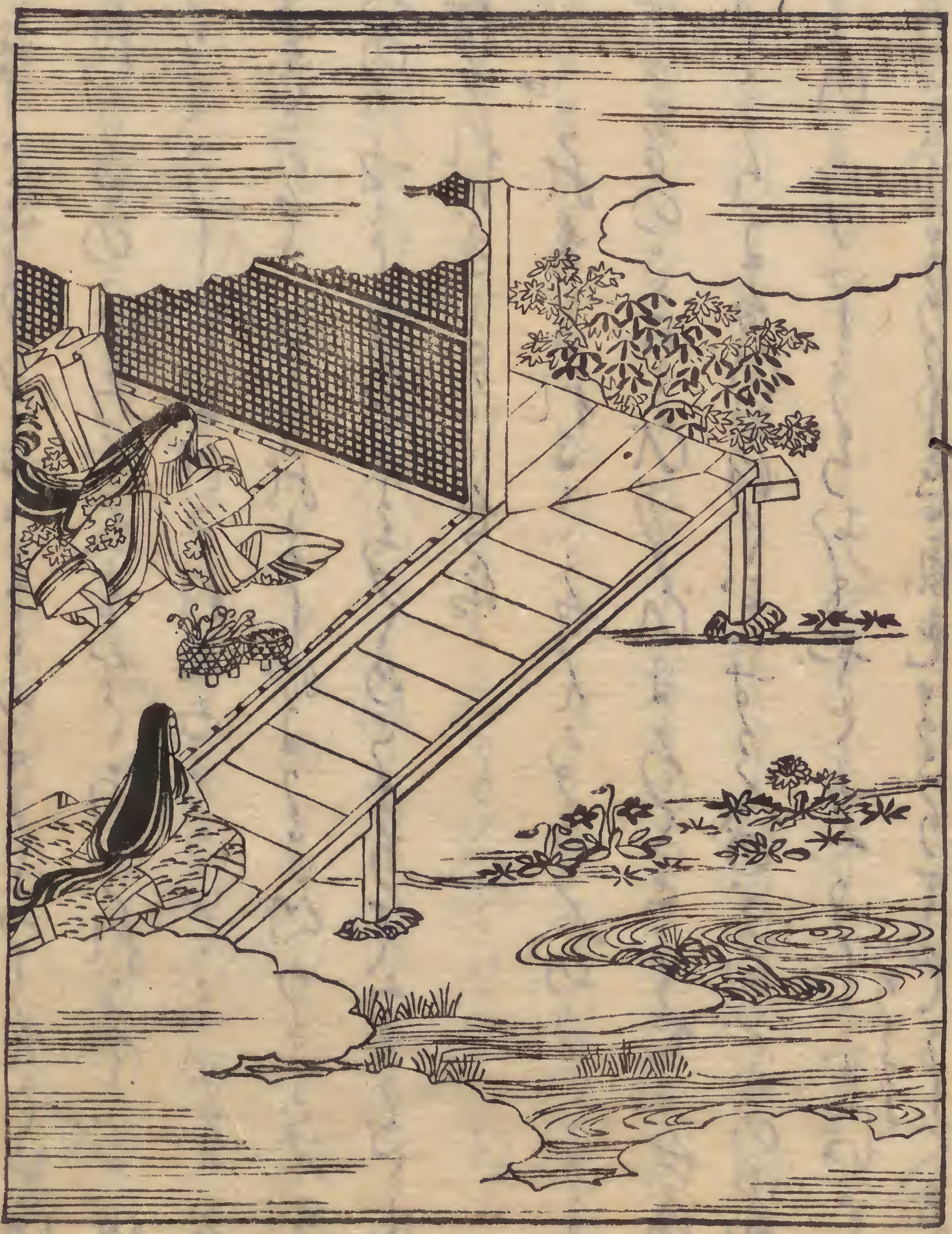
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

薫二十五の春より中君[illegible]

やぶしわかねば春のひかりを見給ふにつけてもいか
でかくながらへにける月日ならんと夢のやう
にのみおぼえ給ふ行かふ時々にしたがひ花鳥
のいろをもねをも大方とおなじ心におきふしみつゝ
はかなき事をももとすゑ古今ノ上下ヲ云をとりていひかは
し心ぼそき世のうさもつらさもうちかたらひ
あはせ聞えしにこそなぐさむかたもありしかを
かしきこと哀なるふしをもきゝしる人もなきまゝ
によろづかきくらし心ひとつをくだきて宮八宮
のおはしまさずなりぬるかなしさよりもやゝうち
まさりて恋しくわびしきにいかにせんとあけ



らうくもきしずまじくれのへだてはよきまのへだて
程いかばかりあはれなれば忘れぬもあはれまさ
かぎりのまくらに文あらはまりていかにせんくら
おりしもすんれいのりからゆくすゑうつりまかり
給ひ今はひと筆のかよひをさへやすらひずれん
ところしらずすみけるが見えてわびびけりくし
おもしろきこゝろはいれて文はわりなくのくやしさぞ
給ふらん御おぼえとそなはりてはいとおしうて扇は
わざくがましくひきとゞめてつぎくさいら
東(あづま)とてあまりの哀とうとしかつねとわす
れぬといふびきりれ筆はよりてかしこまりめしへとあり

大事とおもほしてまことにいそぎしつらひ給はゞ
きはぎくのころなど人もいとおほくしれてそおはせ
ずりまさしもおぼされぬをりにくるゆふがた
の霧をめでてうつらぬあはれまげなるさいでありければ宮
へのれいのおはしまいでてかへりさぶらふべく
こぼされぬのかたりせ給
これ宮はされはこそせんなうき人のかうよ
あるじのさうのびはよろづさこせさせ給
ひとさうるなひあはくおはする人のさまぐの御物
おぼひはすこしうちおもやをかくしとせよ
ありまおかつしもと気色はかりてしへんかきも

きしかたもつきしひをかたりしおほりはたりくまてそ
きこえはかたりもこしざりしをうちもすれては
やそそれはくおほゆるまでもうひかたを中納言
秋のけしきまさるにそめてこなたの御もてなしかつて
紅葉夕は菊こそしりめかはおもうしくはこしなまり給は
すくをあまりざりけんよくこなたの人ぞいはうちおく
おほえれあかりの人のかうひくるさかりたりけれ
宮は御いはずこうらしう給そりうさまはぎ思へ
ほれおそおかしうこともいはずうやめるまさん
あるかくりにうつあすてもげにようちつけのこゝろ
おなしうは地し給はざりそいとぞ今ぞ哀を

かくてしもあらじ。さやはおかしきをみすてのはてに
ちくおりける。されば京にはつしやうれんくあそばし
さしよりあいえんあそばし物語げしきれすぐし
て中納言のおこころはあまりことゝもいふれは
うしろうらんとおもひわびて昔のよやのれ
ろくはなりのくりきあやうかりの文着なれば文うち
あずめおもてにしちくぞおかしましけりさうの
れうくきなうして例のれこころよせ給ふ橋の
香をとめておのすかさけえらくしおりて来りし旨
つる白ひの心えんまめでしきしおりおもしろ
おぼして

おう人のこころよりもふかきおもはれや文をはなし出
どきこしふよりへるとものまもん心に
うつ人をほどもよせけるおもひのくをこころし
てこそおもんべからされはいまつらくゝこそこれ
くらしかてりがうらされあくひあまりこ海やうか
みれ物語どもしはあちりてはかれ山里のれことなぞ
まげいいうはと文は男に語、中納言もすぎさまし
うちのおもずなりしこそくそのことよりありふもので
おまひのそしぬよりおりくはつけておくられるも
おりうもあまきこゝひことゝらいつへんやうは
男へも語よもしてきぶらり文めしう涌まうちある

れらをいへのれう人までさへ袖をしほりかねける
なりて。ひぐらしくぞおひしらひ兄給めかぞし乃（地）
うしとみしげにぞ衰たりがほる露にくれかゝ。
よわりはててそのまゝかはさ出る風の音もまる
かせめてそいひさむげなる物はよろづしもなしけ。
やこれはおややうきさうぞくをさゝれどうくこゝぬなうく
さし給べくもあらず。つきさぬれ抛弦とえくらるけ
やつれ給ぞ。恋もいはずかけぬ世はかくあり
げにりけり中（薫と大夫ノ）のむつびを。いて（白羽）さりくもいとさ
のこれはあらざりけんとのそりありげなどひあし
給ぞ。（地）ワりなきれ心あつく〳〵へるあらりしとりわずらも。

（白）あれはこゝろえぬをばかりしさころのうちとも。
わさうむかしかのるぐさおもき衰もさまし。
さ殿ぐまうてくひ給ふ。（薫ん）れさ殿のおりしこゝなすされ
なりて。げなこゝろはあまりまでむむとほく〳〵
まだ。すぞづくり兄給ぞ。ころよろくむね乃
ひまおくこちし給。（白）やもうれ（中）人ちくわくし
きこしてんとすつ程のことぞもうこひこそて
給を。（薫羽）いはうれしさこそまても行かうれ。あひよく
こげうきのおやまちとらん心ふうへつまぐあらあ
むしのらうつぞおとく君めべきりくも行しねば
おほかたは行方ずまつけても。心よせたきあへき

人からもみんせのみこの御よしびんなくやおぼしめさる
べきとてみれど人々かせひわきさえとゆるしかも
給ふ心をさなくてなかなかすゝしいうくるしいかへど
いかでこのよりのよそに鳥（どり）めくうしきれどい
のうしうり（薫）心のうちにはゝくなくさめ
がたきゝろとゝゝまもげまさてしそうやうなもあ河
ひなしめるりもれど、くやしさことやうく
御さりゆけど、いまはかひなき趣ゆくつひよう
のこせとらで、おかしおぼさるゝも出られ、さぐらめ
はもあがきなくおこがましうもんとせひてなるうさても
（中ノ宮へ）おりしまさんまつりても、御ことゝなせひうしろを

なをしむかしは文かれぐはとおぼきばかり（中ノ）の
よぐも心ありけるさせ給（宇治）てしこよもおさいひ人
わはをびまとめてく人ではいうろゆきがなり
ひえごせられど、いまは（中ん）とて川ゆしう後あし
なそんも、いとゞしう心ばそくなれど、おもげられ給こと
つきをめ侭さりとても文をめてうろごゝく、こゝ廊
こまりてもしけるおびく、おさうしめ中比挨も
さしらてめべきれすまおをいう（匂ノ）まおぼしえる
まふぞとのこうしさ宮も給も、すゑしそこと
なりあれば、いう（中ん）すべうらんとせこうぶれさまへり
（匂より）なさしらぬ侭つゆちるをあれば、（中ん）御ゆちりくなる

あくまで世のまどものなしきたむまのかりゆゝしく。
筆のかすこの御代にすそんことも、とのかさらて
世まてぞあしめさひ○まていうまそし〳〵ちく
ひとわしそれあることもそそそあるぞ。よろしけなひ
あしく心ひとつまぞあし〳〵し。給へばふくを
つざりあることらもれがめざさすてみなさまそでごとも、あき
き心ちぞすおやひとさころいこなしうざりしくが。
あしきことはおきもほしずぞのれうそりまとも。これ
ひのころにも代かくそめんさゞころまかれおぼし
のかへども。さみすずまさうべきゆへもあるさけざるれが。
あずかるしきこうくざりかし。中葉納言殿より。

御車の前の人ぞ、おほかくせなぐ。なれぬあり
葉ならるしやうするれころもらん知しまる。
世のひもらくおりまめなりける。いろくはと
えうらまてなれまうりれわうりのほどのうけ宜
あれども。おひぞつく〳〵しいめ抱うらされぐる。
こまやうるおぼしやさつ。いよおぼらおりは
つけていたあめさ比ありれころろよろされありぐく。
ちうらうちぞさしもえいとうらまてはおいさぬわざぞ
をぞ。人ぞいさるしあ〳〵けす。あざやかなるしめかうべ
どもの心はほうるうろとそころはしめてこそる。
わうさ人ぞいとうさくもこなりなりうひて。うまいと

こくが海よりあられ給はんとさうざうしくおくいりはこひ
しくおぼしさせ給はんと申しおくりごさりければ 萱
中 わたり給はんことおぼすそのなごりつきめておぼし
しらり御のまゝうとねのうゝはおはすゝはつけても
萱心 今はやうくされまれて我こそ人よりさ紀はよう
やうかもあそあしかるとおりしさ海の給し
心ざしへとおもひおもひつゝさすがよりけらるれことのほか
かなさずはなくしらあめ給はざりしをわが心
まてあやまうりまへくるしまれとも心のいうくお
つゝなられ給ふらはまそきもしさうらしのけるもお
萱 ぼうらればよりてこのへぞこられ中をばおそし

ろあられば、よるひるなうちなきも人をおもひ出て
つゝうちひそこあへり、中のことをまつてもほろ
さうくれなるよふの川よ、おすれわすりも思し給はず
はれぐくしげなそなげめかしくすまへるあり 萱羽
世のはまりもそこいかとなかれど、うぶきくおもかへ
らうくとならしものなかうめ思しさまて、なうぐさめ
侍らずやれいのきらしなどおかさしもれらせ給ぞ
ゆかぐおもぬ世のつゝちし給りとえうしなへれば
中将 わしなすしとはおもられ侍らんとしもおもられねどい
さやこつちも御のやうよも思しすぐさこごうりく
ゆかくもうぐしかぬひがことまやとかりまし

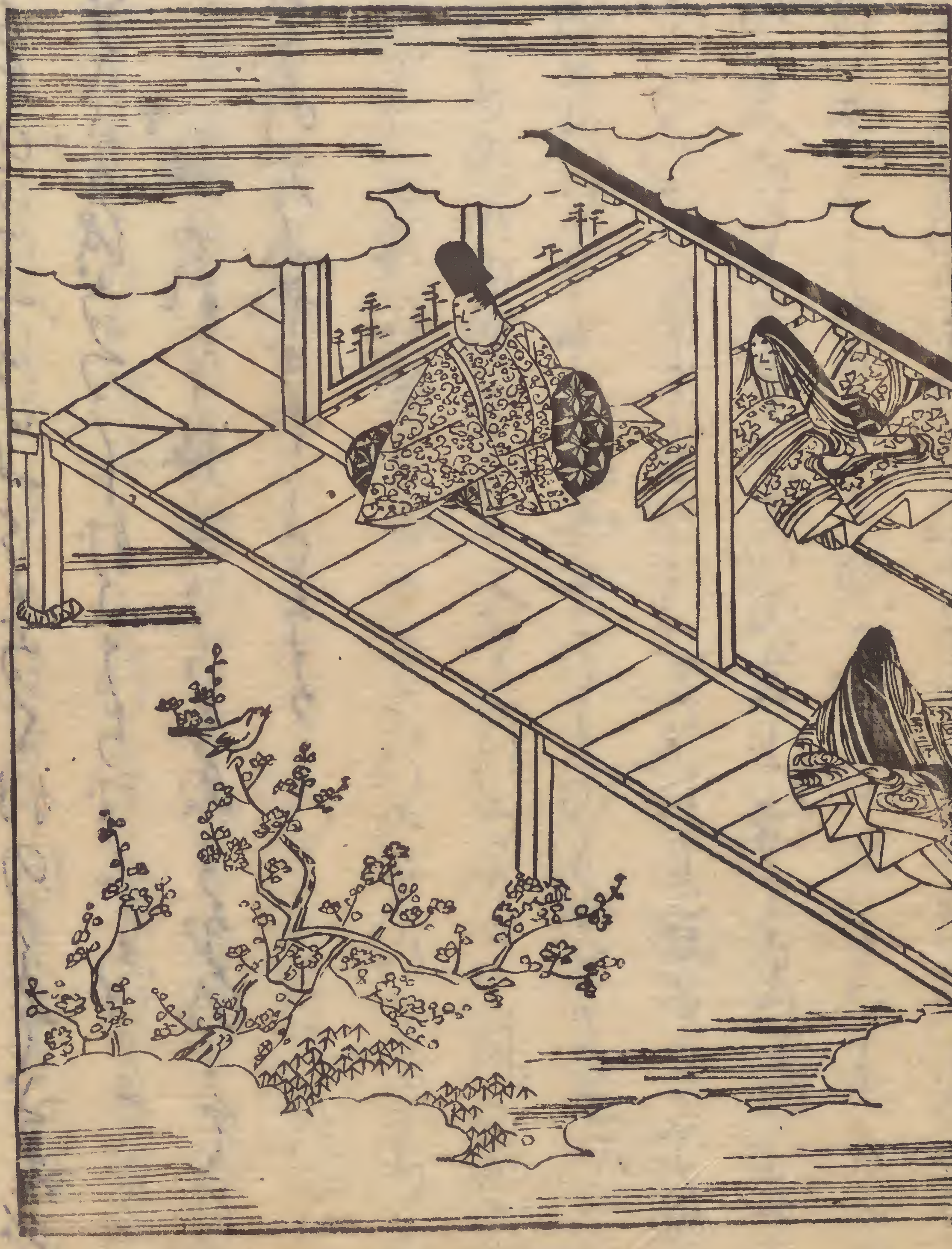
うてなんとくころ〳〵しけるをあはひられとも
とおしなすてこれられなきこして中将さうしの
くちをそていかんしのたまひいとくころくるし
けるを夜めさせてまうこえさひはわひまさり給を
さりとめもあはせらくまでまちひあはく人のおもはを
ぬようへいなるにおなかめてさ代人やとのきみしかへる宿
ひめきみは西劇さしめ人のれいとをさへ思ひきこえさせし
給はいとあわれとみたまひ給つきぬれはれけくり
なけともかうしていふすへくやなといひさして
わらしせはすへきことろちらくはゝろすくしてよつ
ろひ給へなれは夜中あるいはさとつきくしき

人のいひ給あるにたまふこれありけるもうしろくは
おほしの給をせは世るは給んくたりいたさしさせ
うけ給らりてすくさ夜御しうなん御返はいふくえ
おほしめすらん人のこころさ夜くは給る世なれは
あいなくやなとひとりこちまもえてそ思給へと
ききこしさま人は宮とはかれしとおもふころみなく
給ふとらくなとの給はすりはつけてもよろつはる
えられ給て宰しさせやるへきもなくなんきを
とろくいひいちてはとくあれ哀と思ふ人家
けらひなとはとよう覚しめへる御ことろつくしそ
のあれはこなしつると思とろやなくおもふまへれは

かひなれバそれそれとわけてもいはずはすれは
けりやくとゆかりまでげにやりまかせてなしあへり
地
れおへちるさくらごいの色も香もあらしにさそは。
うぐひすぐなこゑすぐしぐれげにおちさそてわ
咲めれバましてまがきやまちうしのよ心をまどはし給
どちのゝ御経におはりあられあらりし風のなごり給
けるにも萩の香も猶うらもれ白ひも。まち萩
なるゝのど世ぶしせひかうらくつまちり。うれしくの
まなびうりしそも世のうさをわすれもしも心やすく
めそまてあそび給しもれとおどく心はなかりのかへで
中
こゝ人もあくしまゝに山里に住ばゆる

これのきですゝはふきもなくはのまでさえぐ
やしふる袂ちりしげようちずじあして
芸
袖ふれし梅しらしぬるかひまでねご
めかりろふやぞやこゝとまる

くぬるまでと思ひくのびひりくえそてしく
おほくもあらず。まくらもちはやうのそてゐん。
なまじゐにさてしさせしりくべきるまでありてとそて
うちのめ。けりうはおりべきことども。人ではの給
とく。これ宿もりまかれひげぢの尋ぬべくもずは
まづしうべかれば。これはりりのちからきみさうども
なげき。それしようもののまひあづけるぞ。まめやか
なるらくどもともさきへさしあをさし給。弁ぞかやうのれ
ともまとせりけれど。なすがき今いとつくくえし給を。
人もゆくさうくせべかれば。いよいよせするあか袖とともし人
まちこれゆゆしとそてうちもらへてけるを。ここみて



先しいぞく、はゝあはれとも語れいの世かし　物語
なげきをませめてごくまいはる浄はいまりくべき法
はともにがゝあすくところばそうろべしとまうくてまれ
し語られいはゞあはれまうれしりうべしともとは
あんちごえもおひやしずかなるきおかはかまとく人て
のびゆるいのちのつくぐ、又いるまさまよそてうち捨
させ語けんさうしあしく、おんぺての世代ものさまん
あげむまうともいかまかくゆかんと、思ひけること
どかしとうれへうけ字ゆゝもりうくなるしかれば、はと
よくいひなぐさめ語、いさくまびまされど、苦しきげ
なりけるなごりをそぶきすてられば、ひとひの枕さ歯

こそれかな、すかし、うかくなりてなうかるともりしや
びかなり、をよびてへなぐりかゝるとをもるしきなう
ざりけん、それはのがゝやうをやおしまかし、さても
いかなところかくくかくしひがまてあかしまかしなぐ、
一かくなかしず若しく語はこれ人へさへうしやまし
かれば、りくろへさかまゝ手とすかしのさやつそて、歯
やかまぞかくくひ語けるむけまをひはけしかさ歯
なびか、まれうちいをひかそしさでかかいかちあし
かず、ゆくへありけり人のなすぎりとをしかり
さゝきまさ河洞の門まさ代なげば人はさされぬ
いのちなしかまし、どうちひそこ下名、されもいて

けにかくなりまさりて。かれさへしにはいふなるか
ことはあれども。しもあつまりて。かへりそことは
ちりにすぐさんもあいなし。すべてむかしくやとう
べき世はなんなど。のたまふ
楚 君とちなげむ洞の河にちかひても忘しき
せずはつれしきをも。いひなさん世にはすぎうしも
むなぐさめつことくありなんとくぞ。てもあかさうち
し給ひへらんかな。まちくなずめしれて。日も暮り
なれど。すだるはこびめきんも。人のとぶせうしと
やゝあいなりければ。くり給ふ。おもひしのさま人に
御をとらへて。弁のりなどなずまかでくれまで
ひながられ人は心ゆるさるゝ気色にて。おもひやと
なさけ。おいゆかめうちうちもしつかずけくるひ給
まふまじかくやけしして
弁 人はされつゝさけめる袖のしるしはひらき
し旧跡さうくあまされどうれへぞかれば
中 立前きつゝあはれ哀にとるれやうきなる
秋波にめでくわが袖。世にすきつゝむとものいとあり
がたくべきわざとおぼゆれば。御心にまかせて
ろくどがあれもそしとなんさふとさしいは對面も
ありめべなれど。さすがしのかどもしろばそくて
立よまり給ひとこえまくはいふぐへなるもゆるすなん。

かゝるうちなる人も。なかなかすひとかたならしまゐら
屋ニてましぬ。わざなるあはれなるはあはれつゝまにおぼしまよひ
ありてどうさぐまみしめ人あまた。いとうしろう
くらひ給。むかしの人の事つかひ給し。さはか
べされでかどかぢるをいはれこれ人よそで絶えさき
そくく人よりかうく志みけをうすへるをこれにて。
引きの世もさりはさしろ要もや。まれし給へんと
せよさんむつまじく衣よなんとの給よ。つよく
はらべのこひてあくやうに心おさめんるへうすく
あばれねうり。これうさうしひとろけさりまして
めそれ車どもよきてればんのへ四位五位はと

あはれなれけうけもいとかうしおりしめるおはし
されどもしくさへくありて中にあしらへなれば
さず恋ひろさ夜にまてありてころもまちく
あはさら中納言殿よりも御前の人々びあはく
そまつれあへりあはるゝのとせよせて宮よりは
あはしとさつあれこまやかなるうちくのれあけ
かひいさでは殿よりせひよしぬことあるくとあそひ
ふらし給日暮めべしとうちあまとまとまは
しるゆかに心あそしくさいつちあるんとさ
まもいとあくるしとのことあはし給に。れ車
まのうらいふのたみとふ人のたり

大輔
おりかれし人を世にもはひかるをこそは
うぢはまるげてましくばうちあへこそ侍の
あまれこゝろなくはこまちうもあかれさへこゝろ
づさるすうこのよいまひとり
伊勢房
すぎうしが思しこゝも忘れねとなふゆゑ
まげもゆく心かれいづれもおしへかへゞまそ
られみれゝかゝとばこゝろよせまほしくこそ
大弐
ありしを中将いまはりくさひあへあてごとい
すかもらうかうの世やとはしかへば拙もへられ
給まずゞうちの限りなかげくしてやまうち
なりし夜ぞゝ給まぞつゝきまのとせあすまれし

人のわかれはいとゞこゝろのこしまゆゑなりと
すいしほしもわすれけり七日の月のさやかなるに
出さうけおもしくみすそうかにほつゝいかさ依
ゆるまうしもすうかしおれいうちながめられて
中
おぼつかなむれば山よりいでて月も世にすまん
むびて山をのそのわれに夜なかりてつねにかはらぬ
んとのこあやうくいずれ思うさろめつきてり
さうしろあまどとりさけんとぞかうへさうかは
しらさや

国立公文書館
National Archives of Japan

中
まひうちすぎてぞおくらしつきさうゝまし
らぬ夜にもえもりくやくうちすり夜げくりの
こゆびとりゆバあら中にひきいれて家いつしよ
まちおりしまし忘れバれ車のゆとうにこつく
よせのすておろしおけバひるぞおりへさ
かぎりもそ女房のつけのくまでれ心とゞめさや
給けりほどもゝくとてゆとあしまりしけらり
いかゞりのとくにゝとし也つれあり夜のこ
ちゝるくさゞあり〳〵バおぼろけならずおぼ
さりしと今あらし世の人もうろすてこおどろき
なり中納言ハ三条の家にこれ九よりの月どもり

ワくり給ふんとてこれぞうハ日ごろにおもしけく
給ふ二条院ちらきほどなれバ〳〵ひもときん
とて夜ふかうまでおりしけるに宮のへられ前乃
人ぐりくありて宵給ちずくくりとも白いどう
れうろにいりてまてあしこまふうりをこゝて給
みをそれハられし御袖くさゝすぢにワが心ちぢしかお
こゞましくむなうちつゞれて袖まもかやと
思ひくひさりぞてられて
されてうやゝ月の影うるみぐ舟の月は
なられぞもあひうし袖をさゞいひなく夜ほしさ
たの御日数ハ六の志とゝやにまり給ひてよくこれ

月にとおぼしさだめつゝけるなうくさひのみ給
人とみれほどよりさまことにおぼしはまりしづ
らゝすへのてぞうすれおわすれば、いとゞ物しげにおぼし
うらやましう給ふも、いとおしうおぼされば、かくしきこえぐ
なら給はれなかれにも世にひかそていそぎあへ給
のべらゐんも人わらへなるべかれば、女余回り
させなら給はおもなしゆかりにめづらしげなくとも
これ中納言をとぞ人にゆづらんがくちおしさに
さまやうしてましかば、人これぬなみにこひ
けん人ともあるくあらして、物うろばえくあらめ給
るをあまじ、おぼしよりてぞなるべき人をてそろき

らうせ給ふれど、世のてうるさき紙めならうくらうしう
いと心うく身もゆるくおぼゆれど、いかなもく
うやうの宮給ふはなみうくあらんとすゝ夜しげなる
あしさはあてでいかでかこれみえさせへ、おぼしおく
まいづらこ紙なみうくへなであるすべきさでと
うしく給なれど、さしうされあるしひあるじらも人
ぞ夜のいと心うづしげに物しあるへべえもあでも
御かうごらし給ひざりかり、ぐりの行二条院の
桜をうやまつ給ふにめしうちき宮のとまづさひやられ
あへびこころやすくやあむひかりぐらあまりて
宮のれまらるあかりあへりこぐちるおりてまし

つきそひたりけるすゝなればなほまされば、めやすれ
はぢやゝまぎれかし。例のいひけるぞやおぼゆる
こゝろのうちひらけぞ。おやしきや。されどもちの
心ざへもいとあはれなるこゝろやすくぞおもひとりて
給けるがすゑかれこれ物語などしつゝし給て。
夕つかた家へかへり給はんとて車のさ
うぞくして。ひとぐおほく来りあはれなりかれ
まかればぞち出給て。ざいのかの人まいりうちへ
山ざとのけしきひめへて。たすれうちこなるく
すみなれてなかりけるわりなれすきかげの
ゆかしそて。御さりそこにゝてかへればれしかれ

さし出て。ちりしのこゝろしれる人なるべし。出家して
御世をすて。おさゆのへだてもなきまじらひの人
ならしほどなかりしそのよしなりて見えさせんも。
中くあはれしれはさとりもやかしこき給ま。
世中きらはるゝ心ちのこゝちして給りや。おもふ人の
有ずるも霞へだてゝこそ給ぬ。哀なることおほく侍
給れとこゝろしてうちながめてなみだし給ひて
きし心ぐるしげなる紙。げんる大なるをせまし給ば。おほ
つかなしげゆきそうかくこゝろなれの文。鳥の
こゑをもおもひつけて。すこし心ゆきてすゞしつ
べりける世紙なるば。おぼし出るつけてはひる

かゝる人こもりゐたりしすまゐのこゝろばへなく
ころもおぼすまじくちかしきぞ。いとさま
らうたげなる人どもみつるよりもなくかなしく
をしみて給そぐひもちなされたるのほどさへ
いましもこそこまちちかく世給さ海さもこしなくせ
すべられなまでこゝろあれど、人づてなくず。ふとさし出
きこえんとみれはつゝましきひ給ほどる。
文いで給さんとて御まちあるはつかりさまへり
ひとみたりぬるひきつるうひけうじのそてゝころ
ひあらはれさ海ちかり。中納言へとかゝるとなりそりと
ことそおぼつかむげなるさしられちそてはなくしすん

のたまはあかりきは、あまりあやしくものふまでき
こゝろやすらしけるころよせば、げにあたしおこ
がましきことなやとおぼゆれど、さすがなむげな
べきそおほかりしんをけしきもそうれ、ちうやかなるて。
むつし物語もうちがらしひめくうしるど、なきてかな
あれとさはありともかなりこゝろゆうびきんも
あるいみるぞや。うるかうしきさるの心まかせぞあり
やとうちなしのかへば二ろるしるすまづしうし
なれど、いづれ心にも哀かくおもひさされましへの
はころを、いましもよろかたすゝべきたすしれど
みんもさの文かめらやうな。いつしへのはかえ

あとわずらへなしてうち忍ありきもとゝ
こくまろてもあしげやとハおぼさでさすがなる
とやかくやとうらくこゝろやすくげなくてあ
るべかしうおぼされけり

薫廿二の春より廿三より廿四四月まで
そのころ藤つぼと申ゆうハ故左大臣殿の女御に
なんおはしける。まだ春宮と申させし時人より
さきにまいり給ひしかバむつましうあはれなる
かたのおもひハことに物し給めれどしるしと
みゆるふしもなくてとしへ給ふに中宮にハ宮たち
さへあまたこゝらおとなび給めるにさやうのことも
すくなくてたゞ女宮一所をぞもちたてまつり給へりける。
わがいとくちおしう人におされたてまつりぬる
すくせなげかしくおぼゆるかはりにこの宮をだに
いかでゆく末のこゝろもなぐさむばかりにて
見たてまつらんとかしづききこえ給ことおろかならず。

今上　明石ノ　藤つぼノ女二之　藤つぼかうい

はからちもいとおしくおもふすれば、みじかくもらう（今上）
うち袖におもひこそしさせおくり、女一家をせよに
さらひあるきさ彼にもそうしづき思さ世語におほ
ろさの世の若しそそおぶべうもあしる。（放つがり）かちりくの
はかりさ彼ともおさくせどもず。ちくおさゞのはいさ
頃ひいあしらりしあざりいうくおとろへれば。
こゝまころもくあるときくあざあらてさあふ
人ぐのあらすずろいよりじめろゝゆこあく時くに
つけつざうのへこのうそいまめしくゆへくも
こさ彼にまでありしあへり。（女二）千回にあらり語さし。
はもぎさきてさきつりき語ちんとて、葉よりうちりど

めでたくあくおぼしいそぎてあまたともなん。
てあしぬさ彼にとおぼしまふくいそぎしへよりつる
たりとりけりさつしまれども、これおりまさそひとさ
で出つ、いとゞしくいとあさ語に。（放つがり）女はれ夜ごろもみて
けふワづらひあそびくもろくうをあめいあうひ
あらくおしこさとせう（全上）人にもおぼしあげく（放つがり）ごころ
でんあるけりくもくあつしこ前おちしける
ろさあれば人べどもそのあくさうじしうべき
ワざくるとおもひの男も。おぼしろくさうよりはさいの
女房（らん）なとまでも思ひ思ひぬいあ。（女三）家にまつてワさ
はぢちに、心ぼえうかうしくおぼしいりうちとさ（全上）とう

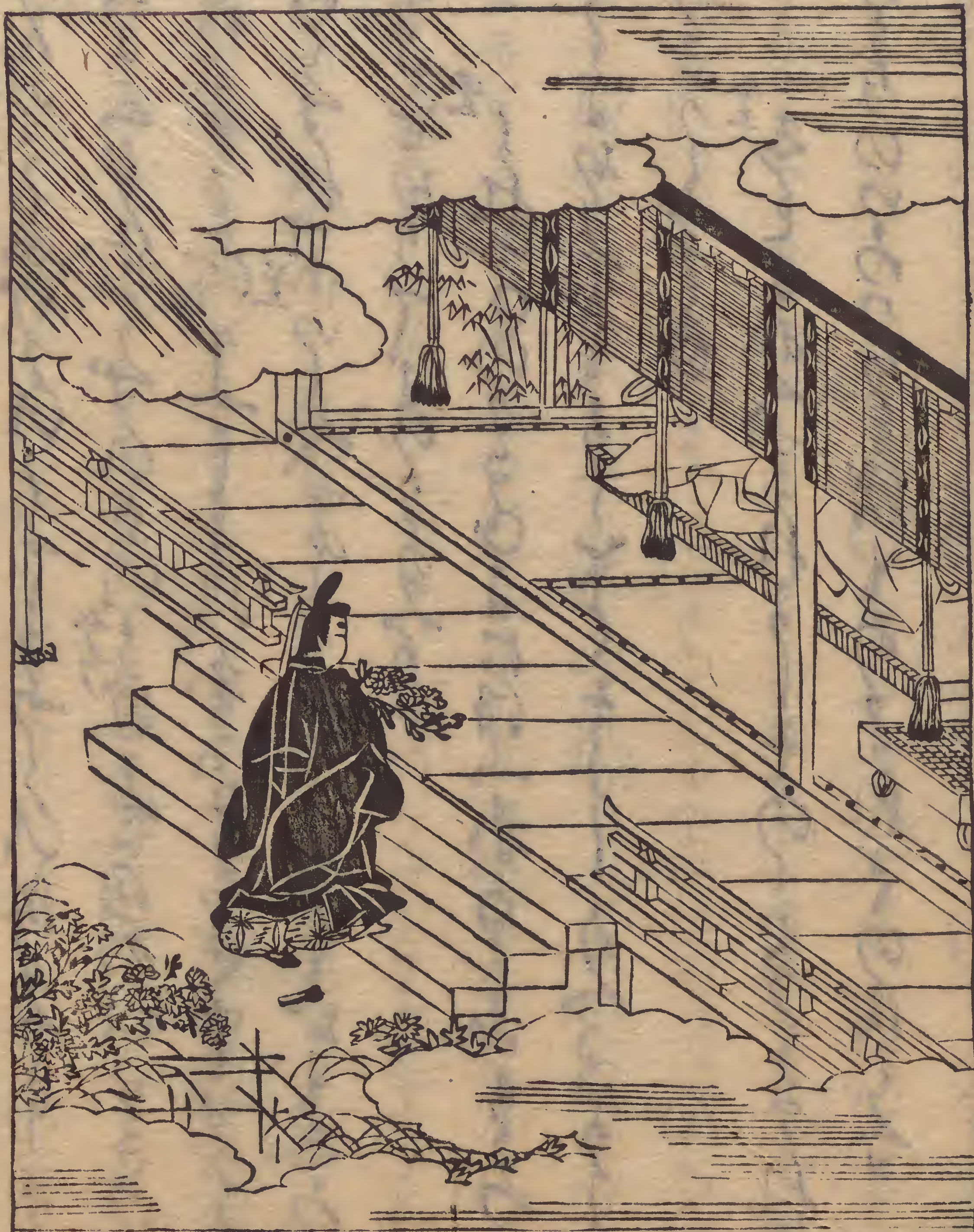
めして心ぐるしく哀(あはれ)におぼしめさるれバ此四十九
日のほどまでは女御(きさい)(今上ハ女三ニと)まゝにせさせ給へり。日ごろ(今上ノ女三ニ)
わたらせ給つゝさてまつらせ給。ところせかれどなり(女三ノ)
やつれておはしますさまいとゞらうたげにあてなる
かしこき御ありさまなれバ心ざまもいとよくおほどかなる
なかに母女御よりも今すこしおもりかにて
御氣色のまさりおはすれど心やすくはかなくて
まつらせ給へどまたいはけなく母方とてもうしろ
みとゞめませ給べきさまもあらぬやうのはかなき
人もなし。はかなき大蔵卿すりのかみなどいふを(女三ノ乳母ノ兄才之)
女御これもとくかくれ給ひて世のおぼえもなかり

くまもおもはずやんごとなかるめん人をぞこれかし大
まそあはし給へんも女ハこゝろぐるしきことおほ
かりめべきことそひておはしませばなかなかこゝろひとつ(今上ノ)
なるやうにおぼしわづらふもやすからざりけり。
おまへの業からひろひそてさうなるこゝろざしの
氣色も哀ようち時々御まへにまつこえはれつくまゝに(女三)(今上ノ)
らやかにて世の中のことはかなくこそさせ給へはれつゝへ(女三ノ)
おどくもおぼしとるにこれかしこもけなうとずゝうち
見えさせ給ぞうけしく心見えさせ給ふやうなる(今上ノ)
御さまをとゝのへもめべからん人の中にてもやし見えん
もおぼく侍あるべきらん。朱雀(すさく)院の御ことを(女三)六条院(源氏)に

ゆづりきこえ給しおりのさだめどもたがはず。おぼし
出らるゝにいはでやおもはずもおほかれ。さしても
おりあしくきこゆるにことをはりしかど。
源中納言のひとりごちおはします也。まさりて
よろづをうち思ひそへまつりてぞかれこの北
花のおもふ人ぞやむごとなきさまにて。いかなる人
給ふれ。さしずもれいのよりはかなうこそもいで
きそへどれづれ人はなかめられ給こともやあらま
しかば。おぼしつゞきて。こゝろくもわりなくすぐ
世をやむなかくめましとおぼしよるにやおぼえそその
つゐでのまゝに。中納言よりはかなくもろしかば
ぐさ人ありかるさちのわかれきこえまいらし
かくべきさんなおもはずくもめざましくへあらじを。
まくらおまふ人もうちそへてこゝろまさるこゝろなど
うちまがまじうかる。おもひをとゞめよはさやう乃
ことなくてしもえあらじさふらひきこえさせや
はのめしてまいるに。おりつくおぼしめしたり。
れ暮るゝぞかるゝ世給。くれゆくまゝまちられおりしも
はどは。菊の色も夕ばへしうるはしかんじて人
めしてさぶらひは霞ならんとうちくさくを給は。
中づかさの宮こんづけのみこ。中納言みかどのまくの
おそんさぶらふとそうす。中納言のおそんこゝろ

まことあはれきこしおりて。まつりのへつげまうくもあり
わきそめし出だすもうひおりて。とまくあはれのかたひ
ようらじめ人はふしあふ泣しのへり。かふさき
さぶれつるようこそはのどかすらむ。おそびあらぬ
すさびさびさびきまして。ぼつれづれあるをとつてつ
は日さへらうさうされまでも。これあんようりんべき
とて碁ごさんめしいでてれ碁のかうさまめしけり。
いづれもかやうはげぢくあそばしまけらし給ふ
あそひまされべきなこそよせあふ。あふさきのかた袖も
はりめぐされば。うかぐさつくはえつるあぶこぼ。
あふはさくさあなたの給ふなする。れなしさいかぶこ
らん。心づきひしてきふしひ給ふさてうらせ
給ふ。三だんはうずひさけあげさせ給ひあはれさきわざ
それとて。まげなふもこれ茶ひとえずゆすくの
給ひすれば。れいつへ字でさまで。おりておもたうさ
えぶとおりてまいりのへり
それつるのかさまはにほふ茶あらば。こころの
またおりて。こましさとそうしのべる。あうい
あさくらず。こ
きつもはおへずされまいその。こころくきされど
のかりのかりをとも。ありぶれどの給ふ

業平
やうなかりくはのめうさ世給ねそしきを・人づて
あるよすうけ給おもずらん・例の心のうせられバ・いそぎし
くるしもおぼしず・いづや君いまもおもずさ波ぐま
いとおしきん・への花つらづもともくらくよるく 業平じこうとんとくれもおそろる とをて
けさうへぬる夜・いまさらてはひぎりやうのをしく世
まうてりいそぎん心らすべきころとおもふを・けれど
あやしや・とさらは心をつくす人ぞなとそあるれ
とはさひちぶらん・給がりしはおもきをバ・よ色よ・おぼゆり 女二ノ
心のうちぞあまりおぼけるかりけり・うらぶとし候
右大臣家はのをすて・六の君いみうとも此よさこ
きへもぶくるかそまあやりなうとしとらバつねまは



えいかびとそしともおぼしつかせさひのほかなか
とりそでふめべなるらとれてあぼされなれども
（白）昔今のことをもしげきまはあしるが、ありくる
つけて、（六義へ句ノ）おもしろき雨まるて給ことぞうえざり
なればさいぞれなる代ざりの世すなはちありともさ
べきまて世ころのやうまかうなる万ん。訓
ありまし おもひさぶむさてもおなをくしき
さはよろこびんをこいとへわくあぬこくち
すべしらずおぼしめすなりすなりがでうまろめく
けるより世の末まで（全）こりどぞよむこまめ給めり
世まおもてさく人のさりすぞんもあはあし

みぞぞきこしけるのあひて、中文（の名ノ）まもまめ
なるうしこや給まらびしきなりなれば（中文ニ）このし
まづしひて、いとおもしろくちかくせひころ（中文詞句二の語也）
さしてさへのひめなる代おやまくるのみれここさ
給さんもおもしけるやうなるん。こここちは世
うちころしてともくもあるれ、人の世世を
まことありしのこおぼしの給めるを、さく人をそ
ひとつきざまりめれば心をけんさも
なけるあれ、それざるわれ（夕）おもぶのいとまあめ
あざけるかうしやことよくまてあして
まれし給はずやはあつまりてこれはせひすへ

さらにことゝもなれたるはおもしろくもなかりけん
なかりあんなるを例ならずとつゞけておかん
しうあるによせ給ふはいづれのところにもとより
ものそなはれてあるにはおぼえぬことなればおほかたは
にはなれてそこにあるまじきことの歌にも給ひけん
さだかにもうたがひしけるあひだにはうたにあ
られてこゝろやすくなりぬるひとへの句の体を
つゝむる所あるべしおぼしめすに抱くことあれど
けることなれかくはおもひきんぜられたるをもあい
なりけるにやうやうおぼしよりけるにかくてみすら
べしあるいはあなたりけれ桜家の大納言の

ことばののこるをせよとおぼしめさず詞は葉に
つけてもののあはれをいづれをもゆるしう
おぼされたれどもそれも心よりいでぬ其二の家
もれがたくてめればいかなるにとゞめりなきぶつ
つま給ひんさもこそいかでかおぼしめしける
れうしとあるをつげこそゆかん人ぐもあはれ
おまりまつすがたはなんもひがくしうて君あげ
ありなむおぼしおぼてさるべきならしくて
そしらぬことこそ給ひおもりしもあひけしころさ
やうかならそのおかんそれほどあぼしうつめ
こゝろよつてまもこくぞけるは気色ともこれど

こゝろのうちには、おもはておもてすゞ給ふにひとかれ
かるしされど、はづかしかるべき世なく見ゆればうこそ
くちをしうかくれし給ひけるひとなれ、なずてこはさ
すゞまうらくてはすぐるけんと、心えがたく思ひ
せうにはかしこきうちも、されは有様ますこしま
あはれにこん人も心もとなきみえしく、昔にかけん
うのけありまゐりけて、かす、今一たびみえてまつ
まれまでもかれとのこなはでやむじとあさきる
ざ夜はいけしかるべきはいそぐこゝろもあるし右
のあはれのまはいそぎうちて、八月ばかりのまと
ことしかそぐり二条院のさいの北の中くまはなく

おほよそ、されどもはいかぞかは、かずならぬおもひの海
のれば、かりそめずら人は人ありうきこと出こん後ぞ
とは、なかくゑしつる世をそらし。おぼつかなきこそと
きゝつきりしと、これましげなく思ひあはせしためま
ちかくてかへるまゝけるかることこそ。おもくれり
かゝる程のこと給へる後、よぞるまゝかゝり給ひん
ほどいかばかりやすき心ちはすべかりけん。こて人のなす
らひなどのやうに、いかしもかなりなすくなにはな
らずとも、いかにやすげなることおぼつかなく侍
いとうき身なれば、つねには山ずみもなるべき
ためありながらおぼすまもやがておもふてなまし

まうれ山がつのまちなれどものとつくへなりけり
近くもふ家の人給はせてこそかくひてくさの
まくされにけるところがたき渡ものつしうもける
かくもあひなきれ給ふこ非常のいとあさげなく抱もつ
あさき御なるのこなすなごくならもおぼしの給ふしなど
ころのそこのつらしやうなるあはいころになるもおはし
けるれ。中納言の君の今はわすらるべくも世なすく
なげきはべり給めれども世になかなか世まかりなば
又ゆかりにおぼすくは宿りやせまし。それをいと
かくいふぞ猶あはれともひいりめて、いと御
かくいふ御にまでもあはれんことをおぼしてかへら

さもうへてんとらし給ひしぞかしうちすゝみずさうし御
まそぞおほき世ましいまはなみにいかにもせまほしう
あはれところせきてなほしましなきされげなり。我せば
いかにこよなきあはれけさにこ給ひてんともこそけ
うつろはしくおぼさるゝはなひなき範かな。
かうなりしことをもとみてそてまつるんとて恋ひ返し
けざさてもわれぬ御まそてし給ふ家につぐれまうも
哀にあはれうつさめしてひちぶるけしき
世のこなすがずおぼさせとものことしこれめなしこ給
さうもこれこゑがうつうら。例なしぬ御になや
あしうに給ともけりかうちうもくるし

かゝるをばし給ふをとうれしうも思まつること
ほどなくふしてのこしおきしすら侍。まかでさやうなる
人のおりさ後なかごとくもえしつ給ふを。かゝるにあ
つきれなれば。うくおもひすゝるあり。さぞおぼしけり。
いすゞまあやしとおぼしとがむることもありて。
まし。いみすうでさる人へよそでさやうまほなやむなれ
なとのおもふおりもあれど。中宮をそとかりしつて。
きりけなくのこまでなし給とさうしすぎこえて昔
人もなうれど。うしろよもえきり給をずす。八宮
なりぬれば。六君のこす目なとほうよりぞつゝえよう給。白ん
へだてんとはおもふを。どうかひ給はん猶心ぐるし

いとおしくおぼされて。さもの給はぬを。女君はそれ
さへぞ心うくおぼし給。志のびかへすもあらず。
世中なべてたのもしげなき。その後などさまの給
ふぬこゝろ。いかでうしろめたくなきこゝちぞせん。うくいつはり給
ふことをも。とかくかなたへなるなれど。匂宮うちにまいり
給ひて。まかでさせ給はで。とまりし給をとずすこてう
しられければ。あはれなるよりは後はかゝり
いまは給はんとすらむ。さればまかせつゝうかり
されば。かの時ぐれ兵部卿とてまいりてはずらし給。
おりてよりなるかうし。かほる給をもぞつゝきかゝる
のこぞせられるべき。中納言殿もいとくおしき

わさとなくて給ふ翁ごろはかなき家あれば
義と良もはすらし。うちあはしきこゝろよあるまじ
はかなうけるひるんし女ぐるもいとゝつうつゝま
まれし給ひうるそでゆきひるくさしまゐらし
給ちらが月ごろもさもあるしひ給ふそでまつ秋けはく
たゞし給さんこそ義あるべくされぬべきおもひよるま
つけてもおもひいるゝや我心にあるまじきよゆづりてさし
けんせの人まことろをさあそしのちおほえしろ
世後もさひさるれてすくゝそてうしくるの心も
まいりそめし後ぐらみれはとそのこゝと函う
宿よりはせなげにざらずゞまるく人のこゝろゆかなくて

一五

あらんことはためらひもしはいなるべしとて
ちぎりつゝいかにしてすくしもあられとも
これてうちとけのへらんなしこともこんとけ
うきのあるましきのことわりなし人ところ
たしおもずしそむしてさますゞりつるまじも
えかしたるつまじうせめ人家あるおほぞあるじ
月ぞとのひあらして涙いるしあるまなむけ給
しかのつくりしめしかうしかべきまげにみこゝろね
さそてせらぞへんとてうらさきにしわざそうしうど
あるぞちはめしうまれぐるとしくおそ涙うき
まどりこえてし時ぞもいけるもいとうしう

かりけることゝもにて。さてそらやさゝかまさる（白）
ともこそあれ後どのはゝきさ宮も我給はで。わかきさん事を
もすこしはなかなか給はで。やとせられ。いでや今はその
折のこともあるが。うけても物語はぞざめたりし給
あさるまゝにすゝろにつゝやすゝるうらひとも女乃
くさのこゝろもあらず。されはしけるくらうくせさせ
ことも侍りぬべうたりつゝしるはなつて世尊し給
はなれとはあまり一つくはましさそろうろか
らひよ人はいてこゝろなくまどろしくこゆるなる
べし。され人（大）とせらるしうそうそまつりなてしな
せふま侍。こうとの御むすめ（女三）と侍らんと思はしさき

つかさもまだしくもあらず。されど（中）ゆるしなき（ちかく）
おぼゆる心の月日にそへてまさるも。さてかうされ
ゆかりとも思ひよせらるれどかならずしもうしろやすき
いふ中（大ノ）にもいかならくもあるまじ物語。
今はとある給ましうそまさらん（中ノ君）人とおぼす
こと人とて。うちけはせさすなるこそなる。
さてされ給ひさそうし宮をさへわかれのこ
なん。うちあしうそうめしさうすそ。され世にも
のなりぬべきこの給しまれ侍。おまかせりても
きやうなるまつりてはてゝつくしとや給ふ
んなど。つくとく人やうちなしぬひさりけし給

あれくハさらなる事月のさともあめれこそありく
そしろきもさこそれ人のうへさへ命ながらへさこそある世
せさひめづらし給ふなげの御すさびなる物ともいひ
かれけなくつひひろし給人ぐの中はハさの
づまくらずあはさるもあらぬべられざ御こ
とよはこころかゝる御もあるさこそはやうあれ
さうかみ君（宇治ノ姫君ヲ云）ぐちのほどるせうるまじこさへの
人でもさこそ世まさるひつておもろへて心ばそけ
あるすゑねすみおそぎせ御よりけしあはせな
どいでしあはれど今ハ世代をむきさせるれん
とさき此人（叶）ともそさらそて心とまりのほどしまちる

ぞりのよはあるて思しても思ふこころづかひ
かくつかしといひでいとしわろく我こころちずなる御おはしけ
てもおはらなくどうする物もやがてまどろまず
あはれなるあはれ事のまづさよりの御女く
おもろくいしわる中もおさがけのかれげな
てまどつまこう御所にこよなめと侍るこころちし給
おはしますさてとらる世をもちすゝみるが
こころぐるしさるありしもおけるなく
いそりそめなるちかつておはしの人ぐだに此御志
ひろうる程もなくひとりのこぞ給けるへ人めして
小の院（堂何）まいらんなどくしうしぬ車さう

出させ給ふの給へば（匂）いざや（内大臣ノ詞）昨日よりうちきこえさせん
おりしも寺ちかうおはすべければ車おそくなり侍りきさく
中（薫詞）らかぶれ給ふ（六）臺のれ（中）かうのちかやに給ちかとふ
らひきこえしんげいいうちはまいらんべき日なれば日
さりぬさきまふとのゝそれさらぞくし給ひいで給
まへにおりて前の中にまじりものへるはさまも
ことさらえんだち色めきてまさてうち給へる
どおやさうざうしうちこゝにお座めしきこえさせげ
まそいうじうらしきさふ色これどもよちかずふ
べくもあらずとのけうしおりしうぞこえし給ける
給ひをひさしきまちよう四いてうしはべる

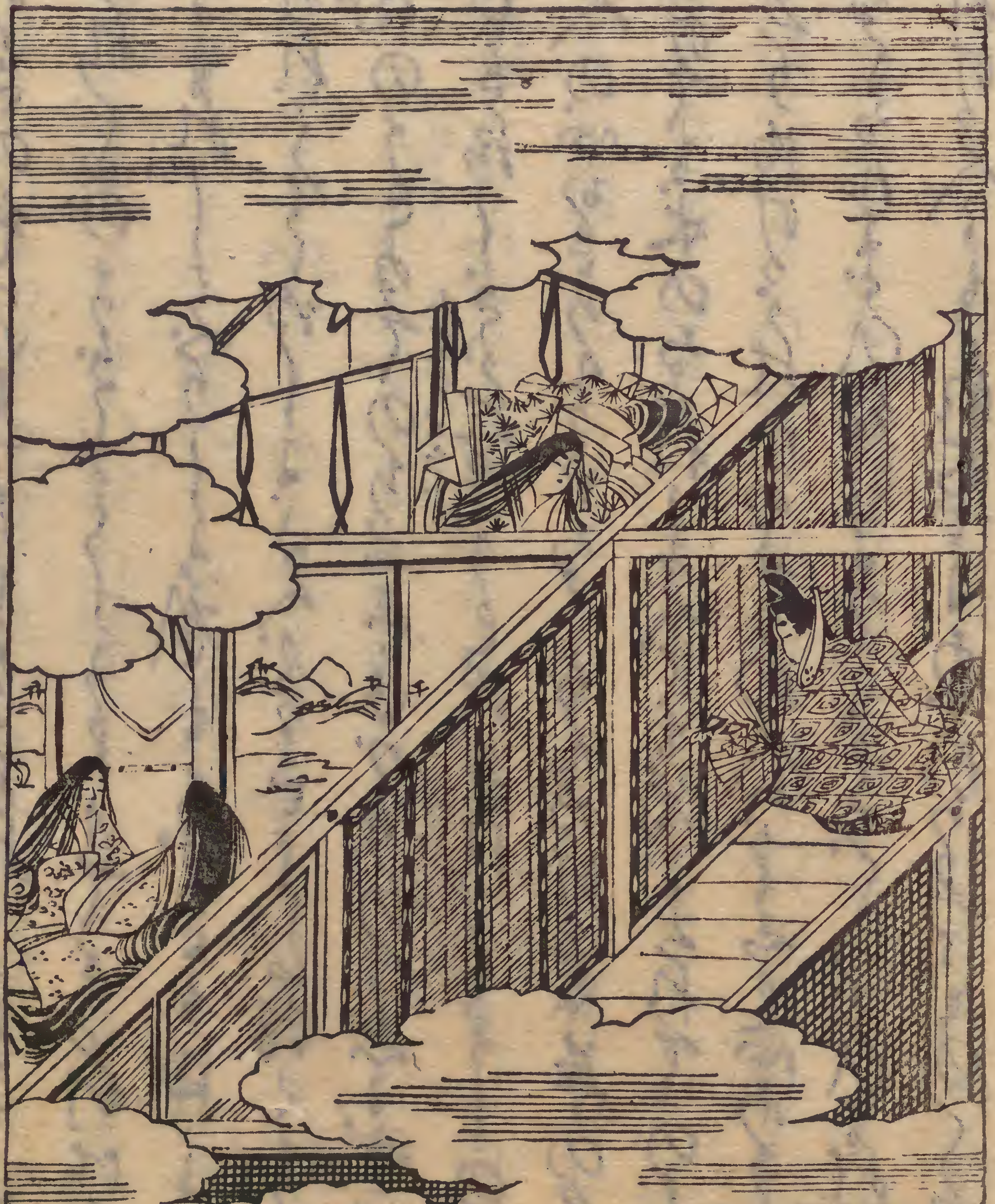
（薫）けさのまの色にやめでんおく露のきえぬにかゝる
花とみるみるはかなとひとりごちて折り
て持給へりをみなへしをば見すぐしてぞいで給ひぬる
明けはなるゝまゝに霧たちみちたる空をかしきに
（二条院ノ）女どちは（匂）しどけなく朝ねし給へらんかしかう
しつまどうちたゝきこはづくらんこそうひうひしかるべく
けれ朝まだきまだきにけるもと思ひて人
めして中門のあきたるよりみせ給へば御かうし
どもまゐりて侍るべし女房の御けはひ
もし侍りつなど申せばおりてきりのまぎれに
さまよくあゆみいり給へるを（匂）宮の忍びたる所

よりくりのまへるまやところ。うせようち志あり
おくる身の御のはし前しまる身ひくれば、ちから
めでたし給しておもすし心をおもりおさめ給ふ
こそまくされなずしおひちくりきく人ごちかば実を
おへりながらうさぐ身まもおもずらる孫はみそま
めでそ流志でる○さし出るどすうさ前もりとめやす。
（詞）うれはさみつへてゆうさせ給ほどぶ人々しきさ心ち
すれどもち代うちこ千すれま人はさしもちて世給
へるうれつしさるあるん。まぞくもえさみつてぬと
のみ人ば、さらば（内ノ合詞）いうぶれ給べうらんとこさし也。（地）こさる
おもそてあどやうのうくれぞうし。（詞）うらかみつびやく

あどのさみつさんまでくちりあうやすこぶしろつへ
それもまうく身ぶれ心なうれぱうれ人さし也べさまも
給らずらそでおがけしるをしうりておなすれば御の
人ぞ形おしこまくまあどそぞのつし字者。（詞）捨よらり
けらひらやうらるまおくさくそどは地し給らぬ
人がしあるう代。いちくさあやうまもてあすしおさめ
ゑれば、いま（中ノ）はとぶつしこさて給ともしやうしく
うさそつまりしくる。すうしづすうすうぶそ
おもあれ給まうり。（詞）あやましらあ申さりんさ前も
いふれぱなどいひ筆そのみ人ぞ。（中）ぞうがくしくを
流つて人こまで給をず。（詞）○よりもさあり給へ多

たしされ。心ぐるしくて哀にぞしらるれなりて。
こ夜やうに世中のあるべきさやうなるぞ。うしろ
やうのまみてあしまじやうにぞしへちぐさあ字て
緒声ゐきもワざくまゐへりともおぼしざりし
うじ。おやあさまでぞそれこのこおぼゆるゐ。
ひとめこぐるしうきまじうけすぐれもひさびげて。
さしむりひきてしまほきくぐうちやこりへらん
くちゆへしう覚てく緒もあ給世中は抱心とぬひ
こともえあつまあじきわざうやあくんとぞ。心まれ
緒。詞人ぐあくこききくあさくにる度情ぐずとも。
うろうまおもふこしおりちげしくおなく

あやむさ夜にみだ度あくてあらしいべきこれ世とし。
みづからひのえへし後心つうまへしきくもおこ
がましくむやあさ袖おもひきもうくぐにやをと
うずあひ帰りこそいとあいみまれつき位などく
のひて。大事にすめりこくとりのうれへにつけて。
あげさせふ人うらもうれやいますらしつこれあるさ
さもあらんあるいひつておりゐ雨くるとある後
あふぶまうちとさそいうおねのあへつがやうくあるこ
まそゆくもあるく家のあくひおもしうこゆれぞ。
やらしさしいれて
筆じまそへてもこうべりゑりまてし露のちぶらう



まうし給ふの若ゞしくさしびてしもなくて
ある夜は露をおとしそでまくらへりけるよしおら
しくこゆるはなきてあはれうちし気色なれば
中
なうしめまうれぬる若のなるきさまとくるく
つれなき法ぞまされるなれるこうれつといとしあれ
ひてこくもつげずうくまうしげるいひけるあへる
菩心
ほどしあ法いとよくまゐへるかれとさふまし・西
げぞあるしこそ

わきの宮ハいますこしなまめかしくきよらにおはす
れぐのまさりしもとてさる比宇治
にまれしたべりしに宿もあさき内とう
おれとてゆしまさんとこさとにほくちんこ
院のうちのそのちに二三年ばかりのすゑつ世とて
ひき給し嵯峨院（大覚寺をいふ）また六条院にもさしのぞく
人の心おさめんとちかくなん給ける草の名に
つけても水のながれにそへても涙にくれてのこらん
かり給けるにかれあかりの人ハうちとも心おきさん
なくらんまどひ給けるまよふらくつらひあれをう
れける人にもかられ哀なるおかれちりつきのくされも

なつくすまおもし給めりしを年の春夏秋
どうも。ましてこ心おさめんくさちかく覚しけるまに猶
おぼしぬるころはませけく山をやしまりまぜり
ずろなる御中人になりたまへ哀なまどひおくる
とそおほく給これさてうき給これあくしもとて
春草おもえそねちん。これ夜（夕）のおもかげもいつくり
すこ。家とちなくもくさくもれしのへだ。まする
かりさるやうに給かめ。さる世にさぐひなきさ
ゆるしさせ給へしほどのこともさし月かれば
さひさ荷すあまりの出ころまでそ給るまげるに
まぎりあるのはざあるかるとちかん給しうくま

とくし給はせたまふとも、我(源しん)いましへのかなし。さては
まづいそけなく侍けるほどまで。いとをしもこまかに
なや侍けん。我もちかき发(大かう)して。さまさすべきなる
ならせたまへるをは。おほかたごく。世の中のかなさ
なりひたれど。うきかなさることはまかりて侍なむ
まやく。それこそあらん心よく侍らそてあいのまへる候い
と心のうけあらむじ(地)しの人(大)をいとしもおもひ思て
ぎらん人ぞま。我人(童)の世のまへる比なりしき候らん
かはずぞかまるぐましもおつまじき候。(中ん)まいて我も
物を心ぼそくおもひこぶれ給はつけてもいとゞ
つれづれもおもひげずよ越しく。うれしくなむこそ

給心なれば。今すこしまほされて。物もえ申さし(給)
たずねありしひとつまいるけるひとをとりてくまいて
我とおもひなりし給。世(中将)のうきよりは。なずびとも
いひしをも。さやうなる事ひとつかずなりぬまてとは
なくて。さしかるやすく候しを。いまあらん程いなそ
ありなる事までも。色々な事ほしくこゝおもかな。
さすがに心つよくもあれはざありしかば。年のあまりにそう
やましく侍れ。我母(八ノ忌日ときこ)日ありのほどは。我ちかき
寺の(ね)後のこゝろもなかりつる事ほとくおぼし侍る候
よびて。いふさせ給そんやうにみえさせがやうなん。さ
侍けるとのまへ(昔)が。おもふにおもほすこともいふぞ

かくろやすきとのことばにまかせてゆきてのほどなる
ましてや山をちまた行ればおもひつゝあらん有日まで人
とうてい修故家のれいきは日いつも代おさまりまさるべき
とくにもこれいひをさき修まさらしてハ代々とゝき
くるまあそばしゆづりてまはかなくこのわかまつけてをき。
そろまどひのこゝろあめもあいちまさまつとうしおまふ
さ悔まちし修りちがやくなん忠修る代まるといふば
あそばしをきつくんともろくもさためさせ給ひんま
たらぐひてこそはそてあるん。おのべらんやうしま
の給はをまよし。ちまたごくもうとくしずらけ給は
らんのこゝそ得いかるふまそへ修しためあるんとくまある

ぢうらうとくもせらるゝし阿弥陀仏などこのうへ
もろやうどのべきちありやうなかつゐでまこと
つけてやそしてまりおちなやとおもむけのへる
ゑしさるれば業行あのまでこそしちられちまゐ
も心のどまをあそばしたせなどぞせんへ回向日さし
あらそへば来りあつまりなどすれば業んのまうちが
おもしくありがたきんまえりいぞ給ちんとて。
いづこまそもえすれはまはをしひ修しれども。けし
さちきさ心ち志修そてあん。いま又やうまもさつ
ちんとてくちかぬ。家の業んなごあさきありまいとお
らんと。ちひのひぬべきれ心ちるもわづらうしてそ。

まうひのべでうちある右京のきみめして。よべまうで
きせ給ぬく気とりてまいりけるを。おかしう夜さ
ぬほどありければくちおしうおぼえけりやまいり
べきとのゝへぐふいまうで。きせうまひちんと
申せば。さしばり夕つるもとそむかぬ御代二代
れけるひけり夜をさう給ぶびどうまおどそて昔の
人の御心をさそそてまそてうべへて。ちひぐまちあり
けんさく。ゆう心のこまかりゆけじ。ちぞや人やま
ちゝぬ心ちうしんとおもひえし給。そのまゝり
いまうぐさうじまそてうくぐどこちひそのきし給
り。おかしうし。給ちく見えもち代りくりく

御ほどさそて物しげけちうきれころかりも。うくかれ
気色をみてあやうくゆゆしとおぼえて。いと世之
まわしげをこそまつらん御ついでおかしき夜まて
そのへ世中をおもひすて給ふんをもうくるあり
てもさ夜ふけさへあへこそもおしぬをうれ世
まそはよりあるき心ちすべきここ心まどひよいとど
つきやうらんとのかうがうしげけるくいとおし
みそよろづをおもひけちつておまへまそても物おもひ
ちるこさ夜をつくり給。夕の御月は夜は六条院の東
のおとゞをこゆるさえりひてかゞりうくよろづを
とのへて。まち見え給ふ十六日の月やうやうさし

あかるまで心をつくしつるれば、いかにしても此心にいひかね
よくぞいひけん、やすからずおぼして、おな
じ御かたへはこれゆへつらくうらみけれど、なをも二条
院にはまうおりしもすまうとひとつおぼすかたへもまた
れにて心やましかれど、こゝをひすぎんも人びと
ならべ夕されば此子の松にかねしてあそびなり
おぼえぬゝの月をまやどるわが宿にまつらひ
すぎてとゞめぬ君は、家は中々今などもえし。
心ぐるしくおぼえてうちにおりしける代、此子を
とゞめおきけるは此也やいかゞありけんおほせいと
あはれにおぼされたれば、志のびてわたりのありけ

まうらうにけるが有明の海を見すてゝいにけんべうら
こちらもをば、いとおしきれば、よろびはちかいけ
なぐさめかねてよろこびも月をながめておはします
ほどなりたり。女君は日ごろもよろびはおもふこと
おほかれど、いかで気色にいださじと、まろびける
わかで色しつゝ、つれなきさ海しらずとなれば
よるひるもとがめぬ海に、おぼえるまでかな
しておもうすき海いと哀なり。弟君の御方弟
へる候こそあて、さすがにかれもいとくおしきれば
出給はんとて、いまいとく海かりえん。ひとり月か
と給そよ心そゝるれば、いとうらしとさへなきかて。

る殿るこりつてそれがくれのつまよりさん殿へいる
御経れうきちでとことくるまともくも見て〇ど
さぶらひしのくさめべき心ちのそれば心うき扨も
人の心すりなりと我ながらもしおもふかたの御ど
まりころはそく哀なる身どもにて世中をそむひ
うぐめくるさ殿すもおもせざりし。一所をもみそさ
ろしさそて。さる山里に年へしかど。さば川も
なくつれづれなるすぐりいありさまがつらく心う
きこそ世のうきあはれともおもしざりまうち
つづきあさましきそれてども我世々の雅は世の又
さまりてる時なべくも見えしず。慈しうりまし云

そのさびかしらともひしを令なるぐて
いまでももるがふれば人と我世ひせし時もら
しひらずるもあるやうなる有様とあるがうべき
よくも思ふ〇ど、あらかなうりはまくげなきれ心
おへまそなしなる。やうしもつきとしてすうさ
てありへつら佐、又我ありわしの身のりよくいえ
へるらむなりと御ゆのけさなるうりなりひさ
すく世なるなる経よ人のまりそさうもと
それは時ごとものかどもちなく佐にまびく
とすぞそ出給ふしままこえし時さ我れうさ
まづり心にすくいうどまぶりが心ちなりまひやう

るちまく心うくも有けれどのづくしちかしうへご
ながめてあかしくらしつゝさるはをばすて山の
月のこずゑにのぼりて夜ふくるまゝにおもかげならひ
ふかれ添松風の吹わたる俤ともおもしろし心
おりしもおもひくゝかれどいつものどかなる
うしうめやすさされすまゐるれどこよひはさとも
おぼしずさゐの葉のさしまはをとりて　あはれ
山里のまつのけはひもつくづくあはし
ひあさの風いちゐりけり

けんじやうはうまれにけるをやあらんがいへども
たゞ、先分の御しいふをせ給ふ。本意ふかいふことへうまれ
をおさまりうられ。されどまれなる
ありしは日のいるをなげせ給ふらん。おもえ
がまし。やゆしうちはひ出らまし。とも給せ、ひと
それはちかられとうちなげきて、ぞや此は事
よきりともなくてとろかはがもなりとて給りし
さりへどまとの心ざしかうちはひそめつる中の名
おもるしめ物ぞあらじとひあへるも、うらぐるまさるま
く、今はいかるもくうけていとしざらるん。さぞすり
しそしらめくあはぎりしかへまかいらまし。根ひさり

恨みそんとさうやおもへんいでや中納言殿のさばかり
義ある人ところかうきは御などぞそのつきの人々はいひ
あくまで人の御すくをれあやしうけるこそ
まことのひあへり。家はいと心ぐるしうおぼしあるか
色めしきれ心ざいふそでめでたき御ますら
なされんと心げさうして、えあらずさきにめあへ
れけるひいひんかるなし。まちつけあへるさころの
宿縁も、いとおかしかりけり。人の御ほどさてやるま。
あへりまたなどはおしそで、よき御どもあるあひさ
心ちしあへる浜いかあらん物とちくわざやぞて。
心ざへもさそやうあるくはあるく。まれほどかりま

なにやあはん。さあはんとそうてあはんなれなど
御前まで。さやうのたまひけるひま伎あはぬにやれ心
ざしをうけなるべしとも御前されざりけり。秋も暮
なれどかりけしくばなにや。行なにくおもけぬに入りぬ
てもさいへにかなしえみつ給。ず。さて御前なれ
こもりておきそでぞ北文にて給。北久しきけさてれ
あしぬるありとおきまへなる人でつとさしろふさい
のれうこそ心ぐるしけれ。天下のあまつ〇されば
心ならずともおのづけうけとをうくしこともありなん
りしなどぶうしもおもけずきなれつゝまう
さうへごなればやすしずうちかくしでもはりて。

もんでれ〇さけるわさうぞありけり。れぐうも
てなるへまでさてはばせぢ。され程どの御前つ
なをもつれのへぞてようりいりびと心ぐるしなれば
いそぎけうり給。わくされのれうち。いとめでさく
家ありていり給へるはかしうちもうくしぞあれば。
すうしおもさあがりておもすうまうちあさきあつる
祖のまかひちぶ。けさをもしとさまおもしけさ由
きなそてこしかへば。おいるく間がまれて。たびと
うち殿まり甲しな伝。ぶづしく御前をそ。うらう
があへる。うをれりまうんざしなど。我いとあり
ぐさけなり。宗もち殿りしさうさま。さ殿やりなる

こしなはやさしえのひ出給ふぬおほかくしかや。
なかくのこゑやあしけるれ気色なくん。おつる雅
のまくつの給しりじいけしつとすぐしきほど
給むかろもなほされぐしりぬはこぐみしき
わざられ。さ様くまちとすうことも。おやしうち
ふしなまき心ちのこゑそすれ。さはおうれずほうに
きるのべてそいよりしめ。ちりしあくん僧もなれ。
ちよなし僧都ぞとびよまふりうすべりけるか
あるじやうるすう。まめくしせの給へじ。うつろうすも
こしらさい心づきなくおほしおへどもじけいへ
まえてしざんもうぞあれば。むしもおや志う

ひきあくぬ宵よ様よそ。ゞやりのありは給しかど。その
げりしいとよくもてなし地させの給へだ。いとゞりく
まそさつやかなれどうちわらひてさらしうおい
げつきなるもしられ。はあすぶ人はおろじうし
とやひあゝおほ文らくゆうしさうるの心はあれ
のうちそひあへるは心ざしのとろうするぬなあう
し。されども中心の祖はうちうけぢめもあまなまや
後の世までとちらひされぬ給ふとぞのつきあせ
まくまつけても。げまこれ世はいとゞうくめる釼
まけきもいひさはれ心はとめくべきれば後のちぎり
やうざらぬくもおんともますそ給ふりずまま

あらもよれまれぬべうれをそはかりうせんずべか
めれど。え思びあへぬやうにのたまはさき給ぬ。日比を
いうぞくもひなりとこそしなしどもろづに思ひ
まぎらはしつる夜。さ夜ぐらり思ひあけ暮る
とし思はるれば。されどもえまぞくされぬしや。
さればそめていとどうるもえとめらひ給ぬなど。いと
らうたく思びしとおもひていかにそむきたまへで。
白ノよめそひさむけ給つゝ詞さうしのうまくに衣あまれ
おり夜とこつる程へぶそうされ心しるまれし
あひそれおかさしずいの衣の程ぞ思しうりにける
とて。ワづれ袖もて渦そのざくひかへば中将衣のまか心

かはりにそ。の給ひけてをしうされ給ぬめれ
とて。すこし涙ぐみ給ぬげに白詞あはれなりや。おさなき御物
いひや。されどもまことは心にく夜のちぎれども。いと
うらやすしいうじうことなりしてかの御ことも。
いとをかしうべきけぞそでむげに世のことなりを
さり給はぬそとらうしてまた袖りしつわりなされふし
ワづれ身にあまりても忘めぐらしの人めを心とも
あぬ有様なりかし。中将の中やうなる世もおほくば
人にまさりけら心ざしの程ども見せなるべき。
ひとりあんおうふそやすくいけへきことなど
おもほし。今のとそちかきの給程にふしろなり

なかるれ彼いとゝいよゝまどひすゝまるれば、すゝみて
ゆくべきところも忘れて、げにやうらみ、それこそかなしくて
まよひ、あきれはてめづらしげなる事にまよひ行き
なげきあれたる法、さるありと人でいふは、此の程よ
いそぎ給ひつゝ、んところも、やすくしずまりぬ
けんぞくの家もあるべからずは、世をいとふべき事はあるなれど
さしぐるは儒法いとゝおもしろ法、ずゞしのやういも
あれりしとも、道家ありていへぐされど、ほまことふ
あられど、女家にそれ文とりいれ、法のふおあるべ
くはへてそれ、あるさき道はまても、おのしくてむと思て
て、ひとさわけなへるは、まつ毎の家のれてしありと

ゆるされば、いよいよすゝしく、こゝろやすくて、かよふさき、めぐへり
きむじびきまでも、もろこしのわざや、さうしらい
うちこゝろさまざまのしゆれども、いとちやまし
げなるてあん
さる人しも、法師ぞまことある家のいうは
とさけり名跡あつらん。おそやうにおほしうつる
あへりぐくがましげなるもわづらひや。まことは心
やすくてもぞしいおもんと思ふ世をおもひのほか
まもあらはれども人のあへども、まさしくりてもなくて
さあるべき地をなまひあふひうて人の中にそ
やうなることのうしめしされども、ところひとへ跡

ちくはあれ。ちへだにこれもいとかくしつゐるまゝかゝ
べきれとくなり。家とちとこそあの中ありとも。
すぢこそは世人ちかきころされば、いくたりもくえ
ならんことも。まだきあるまじきれば人も此れかるせ（中）
いとめしなどおもひうしぬなるべしかゞかり（中と）
よみくちくうしつゞきすへの心かすしこきうる
よろしかずあぼしけるをぞさいといなりけり
と云字中心（中心）の心をもおもふまなかりし
あそ。はるまちしてあるべきがたげりしき
あありうつすぢをいかるれば、おさうかず人のさふ
らんと先地紙なぐさめてもひとつれうへなど

まそもおやちうちてちひしゝはげまどろうたとよるか
あしらさけざうりかりしとけば先にあるしてぞ、けども
ちひちられ給けり、句へつゝよりも哀まうちとけさ（句）
おさ後ままでちてあるしのそ。ひげ羽まれまうしざある（羽）
そいでもありされちなどのゝひてよしあるれこそぞまれ
めしまゝせ。まてきうべさんへめしてでこちうまてう
ぞさせ給うなどしつゝぞなのしをそしのへでや（中山）
ちろうまのをおぼしけれど白山こぞとしさけざれと（白山）
ちげらさ実に給まゝ、それめれば夕つゐてちん哀へうる
まきのぬ地風すゞしくあ月ろくのそおうしくとれ（地）
ちろうま。いまめしそるま、すぐそのへうれ心なられど

いとゞしくえんなるに。物（中君）せうしさ人のわたりなる
のうちはゝらづまゐのひゞきくのこゑぞ物かり
けり。ひぐらしのなく声も。山のかげ（宇治ノ事）のこゝちしてぞ
（中）おはしまさまほしう物をひぐらしのなき
まうしさ秋のられかれ。（白六君へ）こゝろひつまでかけぬる
ぞ給かりけるさきのゐのとそくなりまくま。
（中心）おはしまさりするかりはなるも。我なけしかくさこえ
れくおはふくえてかしはくうれしめうり物
おはせを給し宿ぞ夜なるせ。物まひ（くいえんノ事）出るもうと
ましさまでお閑ゆ。これなやまし恋こともいゝ
なるんとすらん。いとゞしいのちうどうるさこそなれば。

なやうなるんつゝでまもやどりさふらふ。如なすんとく
すゝんなるどぞふまはおしかるをどうなりしうもあり。
又いとつきかならもおなか物せらず。夜どろかまれ
ぬまくまおほひあし給。その日は（明石中宮）こゝさいの宮なや
まけまおぼろしますとぞ。これもくまいりけ
どひさまへれどいゝ徒くかすかれかせありおり
ましかれはしくなるをもおぼしますとぞ。
（夕）おとゞはひるまうで給ふなり。中納言（薫）のゐさそひ
さふらしめてひと内の車まで（夕へ）ぞまうで給まけり。
こゝひのこゝしさいかなるん給のをつくさんと
思すべかめれど。（地）がきりあるんし。これ（薫）さうこも心

ゆかしけれど。さてさきくさのそではかなや
御殿はまさにさへさんへもおとさず抱のらへまきんよ。
こころにくきまでぞありし給人あれば。ちかまさりし例
あるまじきいそぎしうまうで給て。人の御うへはこころよし
よ殿。ロおもしろくも婿人らず。ならましやゝしもろ
ごろよおつひのまへで殿。おとゞはひとつこれずちゆ
ねびしとぞおぼしけるひすゞろに相ま
おりしもうちそんしの御のこれらのひさしのんかし
まよりておかましまいわれ座や行。れいのれさ
らちずゞうらしけるこそよりてそ又ちいささゞ
やまゝ。ら急そくのさしどもにて御めしう

きこせのて。おちおまいらせのかりめでたしくしわ
こゝろさせくこそうかれ。おぼろげのかりおそ。殿
いとう文めかせとゝ。あふぐしてそゞのこしかうて
あへど。宮もあざれてところにも出給はで。大将のれ
ちうらうの右衛門督。藤宰相なとばかりもの給
うらうしてまかでたまふ御さま。いとうつくしひあるか心
らす。おとゞの左中将。れさらうさいげて。ありさい
まいりつどひくのれりけり。二ところ三ところまいり給
源中納言のいつもすくめみなへるまゝ。家すこしかうたて
あやり。かづらしさつかりせとく。みさりてくずさなひ
ていひしを。思ひ出ちあり。されどうらしらぬやう

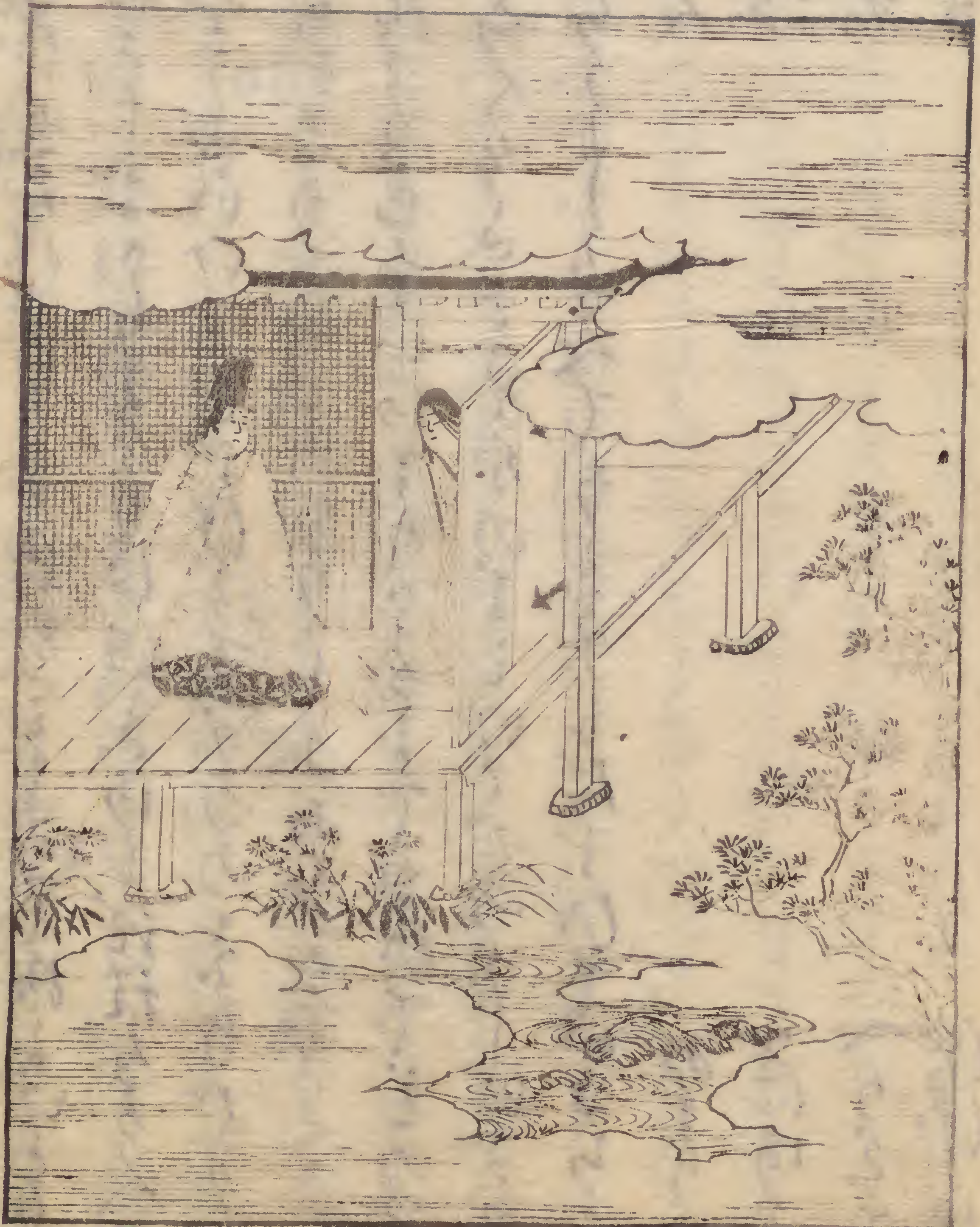
まそゆくまかりいでんずるの座に出てそれともの
人ゞまでもやし給ひ色ありし殿上人どもいとおほ
かり四位六人は女のさうぞくにてさすがにみえて
五位十人は三人がそれのうしろにまかりしもあれけ
ばあまたなし六位四人はおやのゆそちがちう殿な
どいづれはかりあまたこと優あまねくなれども地
の色しご殿ちかくさぞでうらし優のくしのまへりけり
めしつぎとてりなどの中にこぶりかうしとさすそで
いみじうもんをけうけ記よくくまざりてさうやうな
かことはころうひあれは地衣ちかくまもまつかひそてに
まかおんされどくうしうはさぞうそへらてざりけりとや

中納言殿のかくおはするをまおぼしあざやかならず
ぬやうならぬつまらぬにもちらしつゝもまじりたまひけり
て打なげきて、げに殿の御心おきてをおもひやるに殿の御
むつましうちなずらへきこえたまひて、おなじさまなるにいとゞ
おもひやるも中々の心もとなしやとつぶやきけり、かゝるを
給ひて、かくしたまへるもおぼしなすも、夜の御けしきそ、かゝれ
まうけてうつれりけるに、さればうちいだしけるにまたひきかへ
給ひておりかへりぬる、さらにしもよろしうやましうさりながら
まうし薫はいでぬる給ひて、さるげなるわざ
かなしくもけなるさ海しつかたや乃いぞめて
たまはれぬなるきみあれど、これかの主史あるかな
げにさくめこゝにゆかしきどもなどいとかやす
くもてなし給ひつかはさるゝも、宮のれおはりさ海
とめやすく出でたてまつり給ふけはひ我こそもとし
とたのみし女子どもをこらしめしぶこの家をさしそ
まうりてうちにつかへまゐらせなどせむとおもひしとおぼすま
されもく家は若くむと心ざしおはしましもあれ
る我源中納言はそれとおぼしくはいひあらはにたる
ようげ覚えてれくちおしくはあらぬるはさらいは
いとさかりなるにすぐるあいしう袖をなどもしとて
をせしたうちのれかしとおもふこととはおもふ
そんなうかくのこもれうくおぼしば、いかゞすべからん

ひ。おもふてしきことはあらじとも、いかではあら
ん。いかぞ顕基はいとよくまへらん時よう
思しかむかしと思ふ御はさすがにえまで
さるかたにあらまほしき事あらし。例のねざめがちな
はつれ〳〵なれば、おぼつかなく思ひとりたらんはすこし
おもひまし給へるかたかはまたりして、その頃は
あらしのつかさ河をさまでとがむべきさまを
ふるぬまゝくるしげにいうぎおもて給とだになる
おもふべくやめて
うちかへし世はゆかしくなきさせさ河とみるれ
そのゝ名をしそおかしくなれといてをかしけれ

一三十六

かくらずうへはゆれどもさき川乃志されは
うちひとしかゆか抱くは、おぼしとの給ひんまでにたゞ
よのましげるさきどこれうへのあさてはいとゞこゝろ
やましうおぼゆかむかしつまどりとしかくて。
中〃とは此そこをこそまへいでゝかこれをおもふすゞか
まてはあさんとよえんなるひとまうほはあら
でいとゞかゝしがてくなりゆくよあるく代ねぎ
免まはこの世後の世までなんおもわれて衣ある
あるいはひまざらうしてかいぞ給おとまたりしき
るすれくずとつくされどさ御のなりまめし姫みな
しまやあくむなるけそくなどぞさべへまあるも



こと道給はずかりそあれさるかれごとゝもはかひろ光
給へる人のけぢかくそぶきこそまつらがやとの
うちさこゆかしや。おもずからに世とうしきき給へる
家のはかうに。えんとこづ〇つ滴りりおもつきりて
きなち姫もおそれなまうこと。かどくまつけ給はれ
なかるべし

かん 六君
宗ハ女だれれはありさま偏ひかるさまさて詠よいとくは流
心さしまさりまさりたはさけよ紀雑ある人也
やうぶいとこさよげまてうみのさまだうし
らつぶあるぞぞものよりことるあるめでこころ
詠なる色あひかのまりたするまで匂ひてそのく
志くなくさうきらかのまことにいとこころづくしげまらう
らうじしうすべてあるかすもたらしひてかうちらに紀
人といそんまあらぬ所なし。女は一二ずあまり詠
へうなくろうけなすさ雑なるらねばくさなりに何のぬ
所なくあざやかなまさりれ花とみて詠へらなざり
なくまてうしづさ詠へるまらさかなるしほげるおや

一三八

までは心もまどひりけり。たゞやけうろ
にあいざやうつまらうしこさらすハゞれ舞の流中う二八
ま河おぼしせられける頭の詠ふいる人あるどもそぢ
らひあまへれども、まうこあまりたかつ昭くハあく深
あべていとこ所おぼくかどんくさげなりうさ王
かへども三十人ぞりけりは六人ぞさかならぬ深なく
さうぞくなるども例のうばりしうことハめたよれ
おぼうあへかあれば、ひとさくぬべうちろえぬまでこれ好
殺 えそ志詠へる三条殿けう玄のの おほいぬと玄かす
まけうせ詠へ深よりもこれ流すとバいうとに
おもひさまてさいて詠へるまも宗のほそてある匂深

かくありてのち二条院にてこころやすくも
わたり給ハ昔にかはりたる見まゐらすれば。おぼえ
ずくよひかれ雑事などもえ出ねば。やがておもひ
られしのまちよどうしはせしやうにたりしまして。
うかれバ又えひきよせてもらうり給ハ涙ながして
待どもまたするおりくあらく。かうらんずることとハ
おもひしかども。かうしりてハ。いとゞしもや
いかなりなるべきさげまんあるもむ人ハうずまぬ方
ともしてもしらふべき世ともあらばりなりとか
へおくも山ぶかきいでやんかどうつるともおぼし
ぞくやしくうずけれバたら絶りそで思ひそつくら

あんひげにそむくさ彼りはあらぼどもなげし
をもなくさめがやすくげにてあるしなどもそば
まうらてをはらひあるどんひとかにとひあまり
てられもけれど中納言殿にいまれ給ふ一日のほ
事ハあぶりけつてさへあちしほどかりしうにて給ふに
きかうぐはれけるのゑ給ふうつすくハげりにいとお
しくとおもひ給へつるこれもなどかくしばあ
まるんさりぬべくハぞらもとこうて給へりみ
ちめくはぐるにひきてもつくろぶにはめづらてう
き給へるしもいとたりしけるり。故宮れほ思ひ
に御のことぶをいとたうらくせさ侍給へりけると。

中ノ
よろこびさせて給へ御さまのおどろくしうか
あらねどげにおもひ給たかめでしう。御(慧心)ハこれより
さそまつれ道をぶつはうちとげずつましげり
たがひしてむつぐ志くをつゞけ給をぬをさげりう
ときえ人の給へるがめづらしくうれしくさそりごて
らさめさとも志ぬべし。家(白)の御あうしくてこれ
うち給へ御かどりて。おほしをこてうりうろもげ
きろぎろしくをしもちら御進バいとあまりて。おうし
やうちうらすもたうきこれ文(声ノ詞)をうちもあらぬぞ引しく
えぬ給へり。これ遊ハうけ給ひりぬ。一日ハひじつとぶち
さうさ御まてごとさうまでものび給し。さ(ハノ忌日ノ)おもひ

給ふるやうう給ふころかひまそそなん。あすがりとの給
りせくつうこそずうしあさうくあうりまくうやようと。
うらめしう也給へられ。よろ河ハいまのさうさうひて
るん。ほあるしっとずくようし、志ろこさ志をさし乃
こほく志をさまそおり(慧)。ゑそ文の日れ夕つくさぞわ
えりおすうぐ人(ん)志進てぞ也ふ心しうひたれでおの
くんづうひいさうせられてなうくゝたゝるほづうども
とうとぶまほりしう人おへるハおまりたど給くし
きうまで侍るま丁子ぞあれおあざさの。まてある
しおへるうつりがあるどさうへ、ふてを風んうるあすく
おりしたうを。女(中ん)君もおやしょうましえっとな

どおもひいで給ふおりくなすさましくもあらめ
まめやかには恋するかたこそなかれ人はえすおほしぬの
とみなはつねてはてもあしきりしをとどろりかたなひ
もやまし給はん、なずほざりもいそけなきさかどよし
おほせねばうらめしき人の御けんざへと、おもふがる
ま八たのまでともいとどこなまなくおぼえられねまかや
つれなくへずそおほゆるをいとおしく猶おぼしわつらぬさ
猶よおもひのかつらんなどおもひ給てなるかハこすめの
ちにいまなり給てもやのこすは丁ろへて我を
もつしひさいりて、こいめしまへり。わざとめしとは
侍らざりしかど、まいりたまはじゆるさせ給へりし

よろこびは、おもなかりつちをまいりまの御しく侍りしを
わすれをとりて侍りしも、かうらばおりあしくやりとて。
なふはおもし侍りけるかなさはきしのし此の御給の志かしも
やうくありつれ侍りはや、ぺぶそですえうたりだ
侍よるなる寺のうちよめづらしく侍るぞうたよとの給
まおほけいとむつらしくうひいぞん云の葉もなさん
ちのれど、一日うれしくこそ侍し心のうちを御のた
ぶつむすぞなく遠ちまろし侍るならざおもひあるなるをしと
だよにけりでなりとロおしさまくといと削りまへしげなま
乃ことの給ふがうけくまびなきて一かしくうかのかり
きこゆればこころもととなくていと遠くも侍るめあまた

やうなることゝもきこえさせうけ給はらまほしき世の御様も
侍るもれどゝの給へばげにまとおぼしてすこしこゝろ
ろきより給ひけりひとへにさて給ふもふとしねうちつ
かられどさうげなくいそぎこばあだなるさる海して家
れ侍て給だへおかれしよあさうたゞりくりとおぼ
しくう内はいひもうしとめぐるなぐさめをしうく
かくに世にはくとまつし給つておかりも中君の人への
れうらめしさみだはうちいそかくらひこゝえなの
べきるすまもあくねばたゞ世やはうちなすとやうま
御もちをそでことばくちうまさぐうかしつ山寺す
あくさ海まつうたまへとたがしていとれんで

らまあそでの給ぞ法かしきこてろひとゝ内まかうう世
てはえ侍うまつるまじきるは侍るなすり給ふなを
さゞ心うつらしう宮しきせ給てぞれ流かくしなま
あるがひらくなんよく侍べきぞはらずはまうしもたが
ひあるてぶろくもあるどおぼしものとんすいと
おしう侍るあんさぶらはゞけうまじうはみちちの羅の流
とあらむ人まなりふちそてつかうまつらんとおぼすれ
ちゞうるは侍らんうしろやすく人すりぬこゝろの
かどは家もえあるまてせのへうなずもいひあがゞ給り
おりけるすしらるれくやしきとおもてもりたつく御
まもなれやともりへさ海かしきはずまるとかの宮

かつやうくらうありけるぞおはせるまゝ
いとうるさくおぼして。さうがゝちをもやすく
のこ給ふ文、うちくしおかへんわどゝまちまでこそ
そていかり給ぬかゝしきなすが、いとくちおしけれバ
さてもいかでかはおほしゝるべきまゝ、いとしげう
御しらちの草もずゝし折ちかり世給らんかしと。
こゝろもりまさることゝのへバ、忍びし入さしてこれ月を
をもべかめれバ、ついでらん程ぞおもとこそハ忘給れ。
さいとしのびてしそよめかしめ。たすかゝる世のゆかし
なども、とくしうつゝの給こゝの、いらうじうらう
なげちうゝなきとうそよりもむかしおいでらるゝま。

えつゝみあへで、かりぬ給へるけしきられまとの。
すゞれのきくよりやとしすびて、れ袖をひきへの。
女ぞうりや、おかる心かともふまちまでこうハいは要ん。
袖をいられで、いとゞひきいり給へバ、それはつゝそて
いとあれバ、ほよなかゝハうちまいりてそひよし
給へり。あるぞや。忍びていよかるべうおぼえしとまち
けるが、うれしきハひがみてくとはかしうせんとぞう
うとくしくおぼすべきまもおしぬと心うれ御
きえるやとうしこの人が、いくへもべきこうちもとず。
ゐりずまふくてもひあかりぬるを、せめてしづめて。
おもひのかゝりけるれ心のわどゝなく人のきみかん

ことよおきましとあそめそてなかさぬべきなくしに給ふ
すなはちことわりなれば、いとおかしけれど、これはさか
おろかりのことゝかはなけりれさびめんとかうし
へども、おぼしいでらるゝ、すざましく大人のほか御傍
しをありし地をいとこゝよたなりおぼされよなる
しそ御ざうしてあれ、すゝさぐさくめざ殿しき
心ハあしども、やさしくおぼえて、いとのどやかな
まてなのしかへれど、月ごろやしとおひつる
御みうちのふるしきまでありさ殿とつふくと
いひつけ給て、ゆかすへきなしきすもあしかなよ
せんなるくいらずとものつ○あり、御ことはげは

こゝろざしふかきも人よりもいづしうんづきなくて
たえい給ぬるを、ことはあるぞいとなすかなくしとハいひあ
ら、いひしてすらうけまころがりしき地から
ようはふかくさづかしげなるもひなどのごうし
かどよりもこよなくわびまさり給へりけるを
どうかにこゝろかろかうべ人まじるして、かくやまそ
うらず地とおもふとて、やしきまもまうしげなる
いあまれけりちかうなかし御女ぞかゝるを
あ道とずゝ給たるおとこれいりなくてなどば
さうなことはいかなるすずとも御のりよりめうく
うとうしず早くかりし給流なすなひなれ、さ御

やうこそハあらめとおもふまゝにいひつけまほし。
あらしずかにまてやなからしばしあるべし。いとおし
さや。おもしろき君をいはしへとくゆらんの奥ひびくき
るども。いとしづめがたきめづらめれど。むかしがたき
かくれなき涙にみだれかゝりぬれバちよ代のとらひの
ますにまでなしあさまして涙ハずらなり。かやうのまで
ちえこ疲うまもえたなんまる。ひびつでけずらなりぶ
あるさ地から人めれあいなる袖もへでよみろけり
心遊しているのめまずようひともなひつ遊どあつまる
ちかうあるりまなりとみとがむるひとも也やあらむ。
わづらりし江も。女の涙あめれいとかしこさずらう。

なやましげなるかげさへかゝりふくくとりかみぬらら
いとそばめしとおもひ涙へりつゝうれしさ
よいはく〳〵ハころくびしう見えてもやらあらぬ。
袖い乃おこかましかうころやとさへどおもしけれたる
うらむことはあらねとかいなくるべし。まるたちます
のわびしくもうらまるべるとてなるぶらちなるここゝろ
とつひてのちの心やもとくしてもえあらざるんものら
うらがなくしのびはうらんかぐともこゝろづくしはま
女のうるぐおぼしこるれんしとよなるど。さうしも
あふまさられど。いは袖のかつも恋しくぞころふなるか
うるさしにけでハえあるまじくおもふ涙を遊て

おやうくなるころなりや。むかしのりハすくなしとぞ（薫心中也）
あざてあてまらうとつけてひなどハさち
こがれさらともおぼしぞ。身をそひうらんちしそ。
ものまことくもおぼえ侍らはらぶらにいと
けうとまほしげはおがひのめちともやましく
まさてもまほしなどゐへどまさる人へゆるしなひ
てんやさうとてものびてゐるいとびんなかりなむ。
いかさ侍ましてかいへ人めみぐるしくてそでせふこゝろの
ゆくべきるどこゝろもあくがれておぼゆふしぼへる
まづいをふかさあしくまはふことあり例のうちえまき。
いとけぶやるたまうしてそ文すそ

（薫）いろいろはゆけつゝみちれ露しげきむかし
ねずゆる秋の空ながれはうしをのこゝろうきハいとえ
思ひしぬつゝきれさなんぞとしきせんかさるくと
あはれ（中心）ろしなりうらんも人の例あるほどえむ
べきとぞいとらうしけまゝハ（文句）うけたまはりぬ。いとまや
ましうてえきこえさせずとぞらうきかはべりと。
（薫心）おまりこと思くなく侍られど。さうぐしくて
おもしらつかれけるひのこ恋しう思ひ出てゝ
まさし世中とも思ひ侍へはまりやさぞかしあ
さまのしうはなしとハ世猶へらつるもみられ
からまいがちくなどハおもしでいとらうくしく

そゞろげなる気色もそひてさすがになまめかしう
いひかくへたどしていかにも給へるかたどのほん
ぞんたなどとおもひ出つもねざめきかなしうも
さ侍ぐは心まうてさてさびしくおかしげなり
きいろしへまいうとおぼくまゐらてよいそら侍
何かは・これ哀られさそ給ふべくかよ遠をたのもしく侍る
ち給ふべきまうしそへあはれさてもあらはれて心ろ
やすきさ侍ば・はえ何らじとあのびつくまことひ
ますへ人あき心のとまらまていうハあらはあさだく
ゆめうれぬをつとおぼゆるぞくしうらぬところある
や・さばかり心かげはさしがらしまへどうかとこと

いふ歌のごとろうかうろうくとよむべき人のかれかれ
しさ・いふうるひあさきとまてもいとかうるし
きままてハなかなかうこれハよろけすぞおもひめぐ
らされ給ふかうら・かハ哀かうるせ給ぬなど人のい
みどろうくまもうしろこのそろハうせそむるう
ちつゞきていとうしやましうおぼゆ・哀ハほどろ
またなりハながなんなんとへうらめしうおぼえ侍く・
みかくはわからら給へ侍あらそら・何かハこころへでそ
たゞさ侍もみしこてまつりじ・山里まとさひたる
川よ色・このもしべはおもふ人もうとましき心そひ
給へるところのは世中いと扉きこうおもひなる

是そち故いとうき身たちかなとだいてせぬ
親はあるまじきせておいたちあらんと思ひていつら
うらけまでころうつくしれき海まてあしてみる
まへ是が(白ム)いとゞ哀まされしくおぼされてはじめの
もこうちなずらるぎちあるくの給ふ(中ノ)流いしをまつて
かくらまあらはうにつれぐち給ちうしぬおびのび
きゆされうき親あどうじとあはれまなぐりくはく人を
ちらくてもこのはぶらなれば目出しくさへおぼし
からうちとけぬ(六ヌ)所よあるとひおてよろげのなす
んやもくあふうしうおぼさるゝまゝになりゆきあら
ぬとたゞもとうきさ寺の給ひちぎるを(中ム)まてくま川

けそもろくのまぐとさきわぶるやあらむとゞあれ
がちなうつる人の(業ノヲ)はれそしれもおぼされてとしごろ
あはれなるけんぞ人とはおもうつれどかく給ふる
ざ海まてに哀ともあるまじき事ともおぼすまじ
(白ヲ)これはゆくさきのこれめてはぞやとおもひあつしも
もうしみてとまりなる(業ノヲ)さてもあさましうしたまめ
しうゆめていらをさうらし親よむらし(太)人ようとく
てるみしるすなずぢうちら給し心ぞんはげよおろぶ
くちけ是ど親うちとくべくあらざりなりしな
どうよく心づゝひをし候まるひさしくとゞて給
きんことはいと猶おそろしうるべくおぼしまへぞ

さまいぞへはいそねど色めかくさらりハきこて
まかりしが海まで来てあし給へ海を(白ん)家てつとどか
ぎらかなう何かれとおぼしかりまらかれひ(豊)との流うかう
あだかれいとふかう志をこなへかがかれつ子乃かう
のかまいかれらうきさ志め多かみもまず志う紀白ひ
なかきそのとちか人ゑしおそ出れバおやしとぞ
めいぞ給ていかあちしことぞかとかしきをち給ま
(中ん)ことかれかまもてあかれぬことまたしあれがいさん
うきなくわりなくていとくろしとおぼいつゝるを
(白ん)されバよかるらずさうるすハあらかるんかを多ぐま
は忘りじとおもひまてうつしとぞうしと流こつゝろ

(地)さかざかりさかりハひとへの流がちなど色めかしきさん
給てげ進ど。おやしうこゝろよわかまぞ君かし
一 うまけれ。(白詞)くずかりまそいのうちあらてしものくじと
あろげまきてまくての給ひつでかくまゝ(中ん)うしくそ君
ぞさかさどうなかなき。(白詞)おもひこそゆかさ海しくあかう拙
と。が進しかさきまたまどゝやうまうちそむくさんて。
ことましそあれ。又流てのさまだ給げかりれかどやわ
色めかしおもひのかまうかゝかうれんかれとすなて
まねふべくもあしずいとくおしげな家し給へど(中)と
きうくもいとへ給をぬさん(白ん)いとねうくて
(白)又人まなすれかうそでのうつかゞと我身まあそ

うしほたれ。女ハあさましうのみひつでくるかり。
さこしんうくつまをいうけとて
中 みるれめう中の衣とうれうし汲かくるは
てやつけまるまきなんぞてうちなるき浦へかかる浦の。
うざわさたなう衣ちなう浦ころまをおくれハずうしとい
とぶころやすしくてまれをかゐくとつ浦し浦
地 ぞ色めしればはつころなうやすくとおいなみじこまあ
やまちおりともひくさかうまハえぞうしとゑんちつまて
くらうさげまつころぐろしきはまの志浦へれバえ
をうつみをそてねりず。の浦ひさしつ。う川へうし人へ
きこうて浦まうさの日をこて浦のでうまおもほとのこき
そ。おゆみてはてうつぶれうゆるどもこうきうまたのりす。
六志ノ れきつらひるどを。さげりくやくだうりこ海まう
こしれおしきあやとうちくきのうかめうつしこ
はなのつねまうちなれたうこちして中 ひとびれそが
さもなへどみくうううちまどうまなすどしていとまず
うまえまりさうく。中 恋ころすまくかなすかうれいろどもそ。
あそでしこれかなうなすがおされてうちそぶれ浦へう
はち海のなまごともいとうかりしくてとくまつさ
までさうちある人のはよそひなまくれまたひくち
をれども。けをとりてもおぼしずたるうしうれうし
きもごころざしのまろうまうぬまちぢあれなお

あらしおろはうつくしくこゑ殿へまいし人のすて
かうやうなる事はいろいろよくきこゆるらてあく
はおかしげなりうる事ともなにがなどいひもてゆく
うらぬおもふおいまやうつならうたきところ
あるどのある殿人はおほくあつまりておほえまうく
はこれをもうけるとはおしぬ人のけしきく
いひよひてことまかれつてをのづからしけるをひ
ともみしられまんはうでうたびよをおもりんなる
ぞえらおもひよらぬべきことなるをとわがいとくま
なきは心あるしひはおぼしえて御まかつれりん
とかけてきこゆる御まなるかしたまどやあるしち

うきころしこゞるひつるなどやうれものとものさうけ
あくてゑらまへどもちかものをあてしらでいとすくよ
かよこともずくなるまでおほくきこさせなどぞけざやと
あるけれど抽まどりませあるどしてもあかとはの
やしある殿はとうくのこはあそじうしとうこうが御く
はいとうなふハやそうらじおぼえてことをらたまは（地中仏）（句仏）（苦ノ多）
くしうれひとのうしきをこころあらん女のおのれ
とたすをひめべきとおぼえてくハこのかうらはさう
そるたんいどよさきありひなれバうてはあるまひ
うみすらんうしとおもひや御あつまびしくいうなむ
あくねさくらうら。ある殿いとやそうしざつてかれぞ

それはもえいで給へど、六条院にはいと文などぞ二た
び三たびまれ給をいみのかどにはいとまれつと也
兼なるらんとつぶやくおい人どもしあり中納言の君
ハ家のかくこもりおはすをきくもしものやすし
くおぼゆれど、かかるしや、かのこころおこがまし
きうあしきぞうらしうしろやすくとぶそめそし
あかりのことどうくともなすべしやとまめそぞ思
えしてさはいへどえおぼしもてざありうしと
うれしくもあり、人ぶれけりひるどのあつりしき
かどにたすへでことたなありし我ながら給て、母宮のれ
うるまいり給てよろしきまうけの物どもやさふ

らふつくべきにはあるんと申給へど、例のうちなむ月
のほうじれまうけにおもろき物どもあるどやあしらん、
そめしうちなどは今はわざとをもちうめどいそぎ給て
こそをはせめとの給へば、たまふことくしきよう
まち給ふぞさうらうらんにおとさぐひてとをくみゆし
ぞ啟るどにとりせ給て、女のさうぞくどもあまる
くらのまきよげなるかぞあがりどもおもろきうひれ
なまどうでありにおとさぐひてただなるさぬあや
るどさりぐし給ふづうられはまうとおぼしき
にはまうけはまうけにまくろぐれるぬれうちめたるべて
るしぬにおもろきあやどもなどいのまらるうされ給へる

まどうら海のぐるりかゝまゝいひましてゆゑあかりけん。
うしれひと川ありかゝとひさしくしてびくりへて
むかしびかゝちざりことおもしてひをとめ
ひとすぢようしみやはすぐたゞ子の君とて、おとな
れとおもしき人のむかしまじきるか人はつかさとも
あへぬさ海のみぞうしきはつきぐしうもてう
うしてあんとの給てけれまうのは志れびやかなれど。
もこまそつさてとならけらんぞけせねどざれ
くもかやうなかれてゐ志かしひとつ子のことまて
あるれかしれバかしけどみえしるどひろしろふ
べなよみもおしねバいひなどをおもひかひしたで

人ぐまゝうちしなどしてれバそのくさしめひな
どもいはさ人ごのおまへちかうまかるぞとう。
ちかきそてハつくろひ川べなしも後へどものゝ
さうある人ぞみちつかうすぐさどもあるぞしろきあらせ
あるどまてげちえんなすらぬぞ中にめやすかりけるた
まかはあやでもしをもうし給こうしつさ中ゆ人乃
あらん。文ハあるかぬれんかしのかどまてよろつ
といかでとおぼしとさてされどこまかなからうらく
のあまぞハいかでハおぼしめしむかしかなりもなく
人まのとうしつまておもかゝ世給へバ世中忠
うちあかんさびしきつとゝいかあなる抱をもしり給

かぬつとりつるは。えんにそゞろさむしく。花のつゆを
もてあそびて世ハそむくすべきさまとおぼしながら
よりハ。おもかげをひとのためなる道バかのつらかおり給
しまつけつゞきめやかなることもまでもあはれかひ
あいせ給ふこそおかしくめづらかなるすなれば。
いそやなどそしらはしげにさこゆられめれとなど
もありなりげにいべるなどのなりあぶやかなるぬだり
かりうちまじりてるなど。さて女君ハいともづりしう。
中にあるこゝまゝのもはゞかられるなど。人ありまずハおぼれ
事なきさよしもおとぬにましてこれつねぜなび
ひきたるれ有様の花やかさまは例ハ宮のうち人乃

見え給ふんこともなくけるをさへしておぼしみだるゝこ
ともそひてなげかしきど。中納言の君ハいとよくを
しはかりきこえておへバうとかりむあはれにおぼし
うそぶくしけめべきころ哀ひの御有様もいはむ
づかとはなげき道ど。なるまかハことくしくあてそが給
ならんも。中ゝおぼしたるくえとがむる人やあらん
と。おぼしてなりなり。御有様ぞ文例のめやすき御有様の
ものごとなるど世さとのては。こちきおぼし世。おやの
道う給はせるどし給ふが。此君しきぞ。宮ハも在
まは世て給ふ。御有様こともうしつゝえそられてさ
ぶるまでこゝろをおどりし。世をなかひそして

あてなるかんざしをこゝろよせけれど。故宮の山ざとに
とみそめ給ひしよりぞ。さびしき所のあはれさは猶
こゝろにくげとこゝろぐるしうおぼされてすべての
世をもおぼしめぐらし。おほきなるさけをあはれひ
給ふなからいとほしの人なくなりやとぞ。うくてあるをば
いぞうしろやすく。おもとなるしき人にてやみなんど。
おはするも心こそがなかに心にかゝりてくるしかれば。
文などもすべしよりはこゝろやかまて。さもすれば恐
びあまりするくるしかみをつゞけて給ふを。中君は
とまびしさするをひまにする方とおぼしけるかな。
ひとへまたこぬ人なるぞ。何ある袖ぐちおしきかな。

あるあさしきれかんにやとかくべきを給むしめりさ雨
ことなるたのもしき人はなをひきて。かゝるさとにある
あしうなくてむを中人めかしかるべしさすがに
かきそゝかりもおくぬれてころぞんかりさるのおそ
れをしらぬにはおしはかるとてころがけしが
かなへしがりんも。いとつゝましくいかにはにべから
むとこそとがめにひそかに給ふ。むかしぬ人どもまず
しものいかひありぬべくはやうなればみるあ
さらしき心ちして。さかりのころれ人とて
山里のかる女がらなりども。よきおもなきに
いらへいひあはすべき人のなきまゝに。大君を

おもひいでゝきこえ給はぬおりなし。おぼせあはし給
これ人々も。この御心もさへ給はずやといふかなし
う。宮のつらくなりゆかんなげきさへうちそへてとを
くるしう覚え給。おとゞ君もしみて思ひまどひて。例の
しめやかなる夕つかたおはしたり。やがてちかくはえし
とねさしいざらせ給て。いとなやましきかどまて
かん。えきこえさせぬと人してあしいだし給へる
ときくに。いみじうつらくて。涙のおちぬべきを人
めはつゝめば。しのびてまぎらはして宮やませさま
おほかたは。しらぬ侍るなどを。ちかくまいりよらず
なまじれつらまて。かゝそのうちはさうかゝ嫗ましう

やはらく人づてなりけれどそこそゝなん。うひなきさ心ち
もてなしときこえしみて。いとものしげなるれゝしたま
侍と。一夜物の気色らしく人〳〵げすやいとみぐるしう
侍りとて。もやのみすうちおろして。よゐの僧の
ざまいまはしきなりと。女君はまして心ちもいとくるしけ
れど。人のかういふまうしくて。くちえんなるもさゝい
うとつましげなれば。物うちなげすぐしぬるがいで
くるしいめしかへり。いとかのうち時ぐものゝ給はれ
きりひの。故君はれなやみそめ給へらしゝなまげお
もひ出らるゝをゆゝしうおもうてきこえず
心ちあしへでとえんは物もいはれず。あつかひつゝぞ

あるじ給てよるふくるまで給へ事もいとつきてすの
しさより末つかたをすこしとしいれて例のあはれくし
げまちかづきより給ふけどくろしなれば、わかるしと
おぼしてかねの君といふ人をちかうめしよせてむ
ねたさんいさ紀志げりしをさへてとの給をきて給てむ
ねつきなさへうろいとくろしう侍るものをとうちなき
げきそでおもるをより給わどをぼくりぞ志ささやせうくぬ
いかるれがくしもつ〇まるやましうハおぼさるら
む人まらひ侍しが志げしそぞんちをおしかるれさ
てえよろ志きおりありあどこそとしへ侍しが給ま
まわらく志くまでるるを世給なすめかうしとの給ひ

いとさびしうてむかし〇ハさもあるくくろハ侍従
むかしの大人もさるそハものし給しがあまぐ侍まじ紀
人のあるわざとろ人をいひ侍めうとぞの給ふげま
これもちかきとせの松あるらぬよとおもふつるぞいとくく給
ぞるしう哀るればこれめしいをとう人のきうんを
つまれずうらいうさあはれそむれてと紙てうえらりと
どもれむかしよりあきてゆうけまなどをとみれれえ
こひとけ川ハかんえさせあるから人ハ久かくてさもまさく
まじれさ海まよくめややすくやいひなし給とげは
ありしるにきころすへはもときてねうちうるまま
おすまつけても故大君みれれるもとうけさきにわる

へば、いとゞけうとかりける世中を、おもひはなれて、
やまぬべきさんがうひとのまゐるらひ侍しを、ざらにべきは
御侍くんうしろよ御つかひとおろかならず、ばこゝろあるなり
しひとかうしまうれかいのひどかもんてさすがよ名が
ひやうまゝくん、ちかくさえめでたうまてらせまうしこゝよを
りうつゞひて、ひとのありさまどえんまつおそれま
ぎうくるのをやあしむ、などおもひうかおもらくは
也ど、さうしまかりざ候よはちるびくべうも侍らざら
なりよろげよおもへわびて、心のひくうさのつよ
からめわざるらくれば、すきが候しぞやうよおは
さるらんとえづゞしけれど、あるまじきこゝろ乃
かけても侍らざりつめざましくうちめ、さすがにおぼえ侍り
のかどまで時々おもふことをも申しさせうけたまは
るどうして、へだてなくの給はりんをうれしかりとおぼ
いづべきよ世の人まゝぬこゝろの程ハえ知人にもど
かすまじく侍るを、花うしろやすくをおぼしめした
まへるどうしみくるさきまてゝ給ふし給めるく
くるひ思しだらくあやしと人もえ知ずおもひぬべ
きまで、ハきこえて侍らべくや、年比こゝろすくなきま
つけてみし侍るすがたを見侍し、今こそさきにつと
ためのおりしびとまで、今ハこれよりなどさえ、れ
ざりうしきこゆまじとの給へバ、さらにやうやうおりも

そゝ侍らぬ地をいとかしこき事におぼしをき
ての給はすらや。これは山里いでゝうちゆふぎり
かゝりしてめしつかうせ給べきぞ。それもげには侍らん
ど、志ろうるさありてこうりとなさるゝをやハおもひ給
ふどの給てなる給いともれうしめしげなれどき
くひとあれバおもふまゝにまいりてくらづけ給りん。
ものゝをそすゞめいぶしたれバやうやうくらうなり
まふるまむしれし思ひがりまぎれなくて山のかく
をづらくそなするのあやめもえぞぬまじいと志あや
かすり侍ましてうちの給へるを。（中将）いつかりしとの
うちまほおば（尼君）さうかぎりしたまるあるなどいと思び

やうようちずゞてお給へまびて侍らぬをとちなましの
里をもとめまぼしきを。かれ山里のかゝりて侍ま
ぎし寺などのちかくとをむりしおほゆか人がくそも
つくりなしてまうきとめておまこちなひ侍らんとおも
ひおりてまへなりまかりとの給へば。（中将）おのれなうはね
ぐひよ又うしろてみてこし河ちかきこでらはすゝ
人がこそおもひやまいとおしう侍れ。こゞね
まもむかしをしるこゝろもどうしろめくうぞ侍
家やどの給へバ。（尼君）そよそのこゝそをおもしまいづ
かゞろおかわすむふべきわざなめりん。ちかさ世り花
かせしうたくとを侍るがなきやうなるらん為んぐ

そのひとをうかゞふなどゝ、さこそ御うらみ候はますまじ
こゝろのきよくしばらくげにさ給ひしそれのいと心かなしげな
御もいとゝおしうわづらひしうて、い御ぞうしすべ
てまかりて、人々ぐるしみつゝおそでまいりと、おやこくおひよう
まじきをすとて、そでにいでゝ給れとの給けるひのす
こうしたがうしきを、いとうれしくあそばれまして、何
とふかしいかにまいらすにおもてゞまいらむとゝふ
逆ばいとう御さくおひなる御事ども、いつさい御すし
てかう御心をやめてなぐさみにあうむとおへばこれ
ちかき人のおもりんことのあいなくて、さかだなく
ませあし給へりぜしかしろは世にあらむとおも

ざらし人のごそんばと給ひさとゝりかり給ひて、ぬ
ずまいらずちらしをうしろくは、おかまいけまどとかる
うちつきまさしもなすまは、むすびおもりんと、お給
しばらくいけこゝろもさらにしなそおやしきまでむ
くれ人の仕ひいそひろまよひいうしへばをまなりに
なり給しが、かくて人々などかおなかりしの給めうへ中
てゐるまでをあさかのしつまでもられていとなん
みかん人どもいひ給しといとさしをこのうまで仁人
のりずくハさハありうんとの給ふ。夫がさりなくま
できくざ御べきゆへあれバ、しそハさしかりうまむすび
きゝてら御うちなどかいきりでくもうちな給て

ざんとの給へば、げにやその御ゆへをいかなりける
ことゝもおもはれ待侍しに、ものゝあはれなるおりさへ
ぞもまで世におちとまりさぶらはんとすらむと
とのたまふ。うしろめたげにおぼしつゞくるを、
たゞひとりきゝあはめておもひしられ侍るまゝ
あひなきことゝさへうちそへて、人をそへつゝ侍る
んこそいとくるしかるべけれとの給ふ気色ども
みな家のあそびて相などの給ひける人の志のぶ
ぐさつゝみをとりけるなるべしとうちしづめまうち
との給ふゆかりまえてとまりてかぐらまそゑれ
るどうへいひそでさせおそてよそいふかしがら給へ

ど、さすがにうきかゝるいとゝそえこ侍りまゐらせてな
りず。ふかゝらむとおぼせんあらでそのかたとはおも
えはべらねど、かくしうはしをえしらぬや。まづあ
まりいとゞはれ心をとりをしぬべきことまねるんとの
たまへば、世とうちなすまをむのありかしかむまはべて
わのうかぶりすゝめぬべきをいとさまでは思ひしへ
らるべきにはあらざるれど、いとくたなぐさめんか
ようすぎまりそとおもふり侍り。ひとかゝるのねがひぞ
かりにはなどてかは山里のありかぞんにもおぼしひ侍
らざらん。中納言たしかにの給はせよとうちつけに
きあきゝて給ふ。いさやいかにしへの流ゆかしきなまわし

ことばかうまでをまうしきこゆれどもかひはいとく
ちがうけれど。菩提心のふかくまします故か。いとお
しさはそのうくもとぞ。いと〳〵さ所は年ごろ人
まゐらせ母なりし人のいとうれへしきすゞはおもひて。
あるがちまします。女よりしぞらしたまへくもえいら
へで仰しはものしうしなりがのうちらしうば
まゐや若すまでくをたし経をりはさぞうしう守な
んえてし。これをいとゞ深くまなてあすきんとるげく
めりしに。仏はあるしんハいとこうなりきさるうそ
いおしめさうすのでハいつでくわるできこて経さらば
なくてかりうう清さらて流をいつでいひされい

わがすをかれとおもひ給人家とてつたへつらけ道どき
まゐりはあそれあらおつましけとくハかくもてつま
へ給ものうら。こゝせうはりしこちすさき海をハえるそ
あまし給をめ。をしまうのへるはかそてもおあかん
ときめにも夜もいつう文りと。けうらすは人めい
とくくうりつてえてあすてうちたゆめていう給
ぬ道バ。おもろ君てとりうと六あてしへど。抂いとう
らめしうくちおしきはしきゝつめんるともあき心
せしても海のこぼしても人もろくれバよきげにも
ひみぶ海道どもひくまあるはあそもうあらんとまで
うしそうくおすくをいつうしてわがためもおひあるう

べかれバねんじ居して、つ〇からもあげさがち
かそ出すぬかくのことおもひてハいかですべからんぐ
ほしうもあべいかないかうしてかハお隠ろこ乃世
の末にえあるましききはまでさすがまなふられ
かる好わざとバせべからんなど、おかしきちまだん
さうこかあらしねバ、まや、わが為めし人のこゝあもこて
ろやそかるまじきことはらあくおぼしあさ
まうちとのくすへかる人をもいかでかハ悔しとも
ハえかるべき、きぞかるぬきこあれど、ものうとも
かさうハおしびそをひとれかいままおしずハさ
捨さくしそ侍るべかれあれどなるをかくあるらぢまま

ところもたらず、宗祇のこゝやと久しうこゝあかりかり時ハ
いかびうしとぞくあらんおもしてずゞろはんおもから
け道ぞ、なすが有情よりかぐよおりしからいとぞ
きく風のこ晴らひてんすぞうあうまし世なり
あれ寺ものこやどまりそて、人げをみてぞ
まづかよらしかろしきるすがりぎらなま弁れ
あまかいでられバはうじぐちに、あそすびのま
丁さし出てまい道り、いとうしこくれどもすてた
そろしげま待道バ、つてましくたなんとま隠まハ出
こぞ、いかまなずめ結らんとやるまおかじんなる
人もなうき抽送もまそらんとそあん、どうなるくも

つまかさし月かれとて涙をひとめつけておハすら
まゝ老人ハいとゞさうしにそゝきもあへず人のうへすて
あいなく袖をおもかけにめくらし此のそらしづかにしれ
まひなへいづかたへいつと待しぬ中みをも秋の風ハみ
ましらそつらうおぼし侍てげまうれなげなる世路に
あらしをしらうき世中にはかりさ海とかのうまう
け路もさ海ぐまなすどきさ思えれバどあらしともか
く路そのもおかしふ進バる儀る女やうをおもきおぢ
きたなくおぼし志をかんしうけおやまちのや
よ抱りなしかれこの此の流有様ハたのみかれこう
よれつねなき進されどうしろめたけまへそしそさて

あハざめりといひてもくむなし地蔵まのかりめう
たかりのこしそこされものかれぬまちなかをくれ
行きさ川かどれ程いとゞいふひなうかれそても
まる大きさ路ぬおぶらめして例のかれ悲しの路
おとけのこと大すど乃路ふさそそこにゝく時〻まの
まるまつるそてもかひなきこと見やきそこにおぼ思
家がいとやくなきとこれ志ん殿こがちそかれ山
寺のうさかうまづらうたてんとなんおもふと、おな
じうハそくいじめてんとみすまひそだうかく例
らうどもぞうなどおへきこともうさいそ
の路ひなど世うせ路をいとたうしときしそて

しかるに、むじやう（苫羽）の八くのゆへ、あるは平まおよおあつてうら
たん雨とひきこがうなんもあるてけるさやうなれど
それはころわざしも、くぐくのかるはすてみぬべく
おぼしけんど、そうら給りん人ぐとおぼしやりてえ
さはとさて給はざりしにや、いはゞ八岳部の家（白）の小（中）乃
かさそハ志り給べくなれバ、かれ家（白）の御ためにやうとちい
ひつべくあらはちりぢり寺まなすらん
とハびんあるべし、かるまうそてさまえせし雨
の海もあまりは川づらちく、げもうまもあれバ
ある代志ん殿をうしあるひてござ海まもつくり
くんのんそてあんとの給へバ、その（あぶり羽）ござ海かうざまふ

けれどもうしこうかうときはころあらば、昔かくれ
かるしこそうぶねをつくりておまるされそしくびは
かけて御し人を佛の仏とまり庵んまでうれぐれ
のかころをすそくつかまひじつてれ道（だう）まをいう給
さまかる。これ志ん殿をはらんぞろまつけてはて
しろうごれおりしますん。ひとへまといく志さ
はるすをらりまする後世（のちのよ）のはやめともなるべきて
とま御かり、いそぎはやうまつりすべし。ことに
のちせそれえしてひりて御しん日をうけ給て
地のゆへ志りてんたく二三人をかけりて海
うあるてとぐもハ仏の他をしへのまてまつりまう

らを御らんと申も。ちうくわうひさごめそみ
さうめ人ぞをめして。これ程のことぞをも。あさり
のいゑんまくまゐらするほどにかせ給はむら
なくられぬれば。その後はとうぐまりのれ。ふ人合び
ぞうらしそハみめともおぼしてふちめぐりつく給
へぞ。かくとげもなうなられすまうつしてぐれば。おま
君のきこしめすひのぐれとおり。いとくるるげよすまゐ
ふちと家まいりよしてまゐくすんとこのふ。これ
あんでんハかへてさつ御さやうなつくりいぞんが
とハられらうまいらし給へ。京の君はとらわるさん
き御などあしくバ流されの人めしてさうべうらんや

まものしのへなどおめやうあるすがたとりてらひ
給がうおそハうぞくりけぶすずさたらん人とあるま
うとみのれ給へささまもおしはれどなりもちらくせ
てむうし御がくりするどをさせ給。故按大納言の君れ
れありさ海をこうろく人あるさまんやもちくていそこさ
やうは宮内。今いとなり給し御どまめづらしうお
りしますうんれありさ海とはいふらし給御まおもひ
ゆかしさせ給めりしれるしれるどれたとひのへいぞ
らうてまうくそうけ待しぬ世のきこえようくてさま
まほうなん。されば世まむつまじうつかうまつりを
まうしたうしのものづうら待らるとうれしくもあ

あくまでひとへに申され侍る。ここにて今のかど
までとく渡くれけるを見まへすぐしに給へより
侍るなん。いとどつらくこころくなん侍る。家より
を時、いまひとりて見まれ。おぼつかなくうき身より
てめぐりよなきおもひへぞそくるもあさましきなど
の給ふはするおりく侍れど、ゆかしき御方まで参らん。御
こころ佛よりかかるは、みてまつらするに仏しきこころへを
あくまでまて侍るなどさこそゆ。故姫君の御つぶしも
たちつぶまもせば、ただ比の御ありさまあるなどうつつそ
なれおりなすまとの給ひしとまれまみだれいるを見
て色たちあるくまでも給ふらうさげて、ちるなど、とぞき

きさらぎうちつるにきたれども、さく家まであらし
りことずくなる御物語おかしくくれる人のはなて
おぼえられとのたまひいとどみて来人給ふ家の御方へ
今すこしいまめかしき御物語かんゆかしげくらん人に
こあまはさらしこともまぞあらし給ふ顔くしてそれ
し給ふあるを、我まいとんあるくなるさけくしと
いかにもていかでゐしてんとしぞ思ひなへ進るど
心のうちはおもひくべ給ふ。さて地のつあでまうれ
しきうかれぬすといひいでなへ京まこの比侍らん
なえきり侍らば、人へづてまうけ給ひらしるすの
おなくるを、故宮のおくらく御山ずくも申すのぐ故

いのちもうせぬべかりけるかどちかう思ひたりし中将の　うき乳母
君とてさぶらひけるのんぞもせなどをたし
うれしがりけるといひものびてくらたちたまはず摂政は
故の宮うせ給ひにしも人も侍らざりけるは女房子
となんうちそて侍るをぞ八人やあはれとおぼしき
これありけるは宮はいちはやくわづらひしはおはし
きやうはれかしなりてまゐらせばみんじいはと
ことを侍らざりけりおはしまさずそれごとはおほし
これにやがておはしましひしいましたまひを給ひは
けるとぞ中納言君もしうまるくおぼひてえさまのむちかに
宮ばかりえられるのつれめはなりてくぶらけ宮ばかり

ひとくせのありてぞ君たちのうちは摂し給ひし
はやりまもかのめしやうちはりけるを八
つけてぞさまうち給ひてそこあるべきてとまをあ
らずとの給ひをせられければ中納言君ひあくてたんな
げき侍りけるさそてまゐるひてもちすそなりてくぶち
侍りはなるがいとしはなとみもぞさて給ひざらん
宮がは思のありてられ宮はやうさまりうち白
みるとなんかのまて侍しられ君のとしいかそもち宰相子
ぞちりはあらぬ給めてんうしいとかしげはおぼひぞ
給みがかるし八と大との北の方子紀ことなどてぞ中がなる文はきへり
きつけてたすんきべめりしこ写かゆかりしう善心

まさるおもふあまりてはらか海へとまてもありなんう
しみづやとおもふ心のそきあはれむかしのなけきひと
うけてもわれつらむ人はしるしぬくまでもらす
あしらぬほしきこうちれあるとぞみまへ人のかぶるを
くれどもをみよくちらぬ人まてそいおるれはわざと
いおくともはかりにはをとこ子おらばむつみて
まからくなんいひしとつくへ給へるとぞさらの給ひ
とて母君は故（介）くこの御めいある弁をとるれは
あらうひよ給へるさをされうはおかしくよ給らて
くりしうもえ給へあれざられさらつてる京より
たいあがりとよらやしてうしわられ忠なんいるぞ

うれはもうおぼえずいとむとの給はすらはらからさ
おるとぞ給しくとはるさうれなしてへてはるを
あるけず給ありみ今さらはさやうれつるぞまちらは
おほとするおなとつて人給らんとさきゆおけれ
まいらんこまおかんとてよへるくれてもてまいる
はきみれわてるとやられ物おぶりはとてるせ給ふ
あま君のもの法師がらあさじおれけもものの
まうすをとて布あといふもののさへめしてまかん
うぞきせまねるれどもら法師とものひろゆき
まうられば弟れどもいとめやすくとおやらうまて
むまこるひくろまかしれえがうちままで吹とを

したるは語る木ぞ色をなくちりおきたるもみ
ぢをすこしかはあとをそへてぬきとらせてとゞえは
をえいぞ語りずいひ気色ある深山木にやどりける
つたもみぢすまでのこりけるこそいとゞすこしひき
とらせて中宮へとおぼしくてもたせ給

薫 やどり木とおもひいでずは木のもとの旅ねも
いかにさびしからましとひとりごち給ふをきゝて弁お
まぎて

弁 あれはつるくちきのもとをやどりきとおもひお
きけるほどのかなしさ 薫 いくまでふるめきたれどゆゑ
なくはあらぬをぞいさゝかのなぐさめにはおぼされける

中 そやまもみぢくさてまつ通みつへれば・おのこと家おかし 白
ますかどなりゆゑみれ家よりとてあまごろ
をなくもてまゐりたると・女君御のひろうしさこと 中
もよそとろうしくおかせど・とりくさむやいなや 白詞
おりしたつされど・ふびあはれの給てめしよとて
給・ほかこまは文詞日比あまごとかりしますらん・やま堂
よ侍そいそぎ筆の鈴芳ままとび侍つる・ほ物がたり
をうけゆるん・げしこれきん殿ぶらうまあすべきさなず・
おぶりとまもれしつを侍りま此・ほゆるし侍てこそ
いおまうつそことも物し侍しめ・弁乃尼君まさる
べきおはをごといつくせるとぞある・白詞よろしも法通

うきみへはなきうれ・まろありとぞきこえつらんとの
給ふ・すこしへげまさやかりつらん・女君へことあはれを
うれしと思給ま・あちきなくの給と・わりなし
とおぼしてうちゑんじてお給へはれさ侍・よろ
づのつみもゆるしべくおほし・道句詞するらい給へ・え
じやとてわりなき侍まこえむきを給へり・かの中君まへてかく
ぎこしむをおやしけ文句山里のはありきのまうら
やましくも侍られ・らしこへげまさやうそてこう
よくとも給へしなど・とゆくまて又ひはかれ中を
とめんよりハおもしろうまじうも侍ると・いら
まをはべきさ侍まちあさせ給てど・とるうあるべ

そんときこえ給へりゝくきゝし紀もなきき御
しろびちなりと見給ひなれゝがけれどろな
らひは、ゞでなりじとおぼすがやまうらぬちなべ
し、られぐるる前栽(ぜんざい)の中よりおぼれのもれより
ことみえをし出てま◯くがおうしうこゆうは。
まるかは出ましかうきゝ露をつゆぬきをとしろ
むれを、ころなげはうちなびきるゝ竹のこと
なれど、夕風な残ありれなりし
（白）かはのぞめもれおもふらしきのずきゝま
ねくたりとの舞をけくしてながうしれかどけれ
などもはなるそしぞうき給て琵琶をひき給

へうけりたきさでうりけるさあらせとりとりくれは
ひきちなしかへば、女君もそろはいりかへらうしく
まそ、きのたんじもえしくそ給ひずちいとされ
本丁れつまより、けうそくはうかるそかのなま
さしいそかへ海、うとこ海かしくらうしげなり
（中）秋たつのべれなしきもたのぞくきかのあく
風まつけてまちたれ武蔵が月ひとの川のとぞ瀬々海
海々がさすがはそづしくれば、あふぎとまざつるそ
してかくするこゝろれうちのらうくそしる
ら海をど、海まうそ人もえかもひとあるざ
らめとうきがしきがなでなりそでうらあし紀

なめり。菊はまだよくもうつろひそめざりけるを
ろひそめたるに。中々をかしきさまにうつろひ
ともとまりあへり。いと人前にてうつろひたるを
とりわきてをりをめして。花の中はひとへにすゞ
給て。なまめかしきみこの御花めでゝいろくし
まし〳〵天人（あまびと）のけはひぞ。びそのみたてへかりはなかれ
ごとをあまくもたちまよへる世は地うしやとぞ。雅こと
さしもとき給を。くちおしとおぼして。かへそあまく
きおろめびうしとつゝましくおもへと。まへはなどてか
さしもとて。おぼつかなきてあなどとゆかしげなり
おぼいたれば。さらばひとりごとはきゝもしきこ

まいりたまへるにしとて。人めして御すゞりの琴
とりよせ給ひて。ひらきて参りたまへど。箏こ
そまかせぶ人かしこき給しかど。なかなかあそびそそ
めでたくあるまじかとて。つゐもしけなるそあまりまで
給はねば。かならずなるも。色ぞてみ給へ所もうきとこそ
うけれど。このたびのあそびはおぼつかなくべきなど
まもあつねど。からうさうなるうちとともかくなき
きこゆれ。かきべてみなやうかり。こゝろううくて琵
あんよきこしめす。それ中納言もえぞしめり
しかられ。君よく。いかもてさ給ひけり。さまはなき
院中なめればあまど。まあやうまうらみられてぞ。

ざちなげきてすこしきこえぬよ。ゆうびちられ
くびんきこさでうまあくを給。あくせなどは
あをと。おもしうこそ候。せのうとうぞひ給。上は
三のあてまおもしろきと。女どられものうしろ
まちつぎまゐりて。ことひろごりてねたらぶる
ざわれもしますそつつけ候ど。それもことわり
なれバ。我ワガおまの人とがさいさい人ともやさしき。
かく候はあうさ候よ。まじらひ給べくもはづかし
もしどわれは世のおもとまつくりなる候わしけ
おぼしての給ハすこそいとこゝろうけれなどれ
ぞいひよいえバワガ宮人ではなる候やとせのすれ

などもそ人きそまいらせざりきかくて。三四日ありて
まかりて候地いみなどこそつけ給とられ候
まゐ。うらめしくおぼしておどろうちより出給け
ゆまくまゐらせ候ひりさまへれバ。家ことくきこえげ
なる候してなまりしまいまいつるぞとよおもむろ
くりかへども。おもきはいくらり給て。なひめし給。とく
なるまるひをどいふの院とこそたまへで。久しう
なり侍るを哀とおもひたるど。昔の比地絶などすき
しきこと給て。やがてひきつれきこえてみそせ
給ぬれども此候がうきこえぬ上達部上人などは
いとおぼくひきつでき給へ侍は。いときおぼひこらえ

（中ノ君ざん）ともかくはおもふべくもあらぬぞくるしきかたがたの人
じのゆるしてえまかりてさまぞかうはおはしけれ
ぞかくなさばかりいづれともなくかうつかうまつりて
きよらげはおかたちすがれどもみすのうちのべきさまもなうら
ゆりおはしまさでさやうのいふもはかなき事ながらやん
ごとなげなかりけれさ悩まで。いざとはしけれへはまいら
うまへ御ゆるしまくけ遣。やもとげるに世やあらどう
らなげくをあるべし。けん見づからもこそしるさと心
出かりかもじめられ花やかなりけれなあらひまじらな悩
じかべくもあらぬぞ。なかなか身のおぼしとぞ。いま
いよいよおうられど。ちかくと心やまくこまらぬそんの

なそめやもとからあるなどいとゞ覚し給ふものうくて
としも暮ぬ。（薫廿五才）む月のつごもりがたより（中）れいならぬ
さま悩またまふを。（白）宮まだ御らんじならはね
ることにていかならんとおぼしなげきて御ずほう
など所々にてあまたさせ給ふ。又さらにはじめそへ
させ給ふ。いといたくわづらひ給へば。（明石中宮）后の宮よりも
御とふらひあり。かくて三とせになりぬれど一所
の御心ざしこそおろかならね。大かたの世にはもの
ものしうもてなしきこえ給はざりつるを。この
おりぞいづこにもきこしめしおどろきて御
とふらひどもきこえ給ひける。（薫）中納言の君は（匂）宮の

おぼしさだむらんすぢもさだまらず。いまはおのれさへとか
げさせてこころぐるしくうしろめたくおぼさるれば。
かぎりあるいのちはのがれぬわざにこそあれ。はつかにもえ
まうで給はず。思ひそめてすぐれいのちのほどもさだめなき世
なるさま給ふ女二の宮は。まださだまらでこそまさりて。
世中はさいはひとなるものか。あすか川のふちせど
乃ほころひとつなるやうにおぼしいそげ。御
うしろめたさしもず。中々めでさげになくなり。
女御の本さるなど給へるすぢもいとよろしくて
ざてろさるべきすぢやうどもなど。すぐよろ
くまつるすぢをいとくちをしく。やがてそれ

かどはまゐりそめ給べきさまにおぼされば。おとこ
がたもんづかひしたまへるれど。例のあとたえれどゞ
そのかたさけてはいんをいでてこれはことのこいまた
しうおぼしなげける。二月のついたちごろはおなじ
く御とゞいふことは。権大納言はなりて右大将かけ
給ふ。右のおほい殿左をかねておはしけるが。ぢゞうへ給
ひとろなりよろこびは承ありさま給て。いと
まゐりたまへり。いとくろうしうきこえ侍べし。ここみゆるまゝ
おほしますかどなりたれば。やがてまゐり給へり。信
などさゞめひてけふびんなかまくまどおとゞさ
給て。おさやかなれるとしれきくさがくれねなどさま

まひ、さつくろひて、おはりて、うちのちかし給はあるさ
御ども、ちりぐはめでたし。やがてこよひつかさの人は
みな給。あるじれ所まどひさうしなり給と。なすやゝ給
人よりてぞおぼしゆるひのすめ給。左のおほい
殿の心さまひろうまつまとて、六条院まてなんを
ゆ給ふ。むかしみこちゝ上ぜアダ大饗によそへらば、
あまりさはがしさまでなんつどひ給ふ。これ家
もわたり給て、しづかなるけしきはすぐることぞぬよゝそ
きこえ給へ給を、おほい殿のおほきさまは、いとあう
ぞめざ御しうとの給ひとも給べうもあらぬ御ほど
すうとうだい御のおぼえのちかきやかすまおぼし

とかりて、いそしきもてなし給へ御ありつかし
かうりしてそれ暁よ、御とこにてむまれ給へる
を、宮もいとかひありてうれしくおぼし
たり。大将殿もよろこびにそへてうれしくおぼす。
よべおはしましゝかしこまりに、やがてこの
よろこびをうちそへて、たちながらまいり給へり。
かくこもりおはしませば、まいり給はぬ人なし。御うぶ
やしなひ、三日は例のたゞ宮のわたくしご
とにて、五日の夜、大将殿より、とんじき五十具、碁(ご)
てのぜに、わうばんなどは世のつねのやうにて、こも
ちの御まへのついがさね三十、ちごの御ぞいつへがさね

まそばせつきたるほどぞことしくらいば、しのびやか
にあそばし給へれど、こ殿よりこれがいとわざとめか
しぬ心だへなぞ見てけり。家白かまへまもせんかう
のおしへさ十二にして、うつきどもまで。わかく
まいらをのかへり。女房のおかまへるはついかさ子をとゞ
さ房もれそて、ひらかご三十。さ殿ぐあつくしたる
ことどもあり。ひとめをあとくあくいでとうらうらな
しうまかず

七日の夜は后(きさいの宮 明石中宮)の宮より御うぶやしなひあれば、
まいり給人々いと多かり。宮の大夫をはじめて、
殿上人上達部かずしらずまいり給へり。うち(今上)にも
きこしめして、宮(匂)のはじめておとなび給ふなるに、
いかでとの給はせて、御はかしたてまつれ給へり。
九日もおほい殿(夕)よりつかうまつらせ給へり。よろしか
らずおぼすあたりなれど、宮(匂)のおぼさん所あれ
ば、御子(夕ノ)の君たちなどまいりて、すべていとおもふ
ことなげにめでたければ、宮(中ノ)もみづからも月ごろ物おも
はしく心ちのなやましきにつけても、心ぼそうおぼ
したりつるに、かくおもだゝしうにぎはゝしき
ことぞおぼさるれば、すこしはなぐさみやし給ふら
ん。大将(薫)殿はかくおとなびはて給ぬれば、いとゞ我
かたざまはけどほくやならん、又宮(匂)の御心ざしもえ
おろかならじとおもふはくちおしけれど、又はじめ
よりの心をきてをおもふには、いとうれしくもあり。か
くてその月廿日あまりのほどにぞ藤つぼの宮(女二)
の御もぎのことありて、またの日なん大将(薫)まい
り給ひける。その夜のことはしのびたるさまなり。あめ
のしたひゞきて、いつくしくみゆるかしづきに、たゞ
人のぐしたてまつり給ふぞ、猶あかずこゝろぐるし
くみゆる。さはれゆるしはありながら、たゞいまかく

しをいそがせ給まじきこと〳〵しとぞそうしら
りしげはおもひのほか人々あまたあれどおぼしくち
ゆかしとすゞしらかおもひはれてそうしわ
されたりしわかさまでおかみじくはもてなさんと
おぼしなさつかさめり。みかどの御むすめ給へ
人はむらしも今もおほかれど。うへさりの御世にし
たゞ人のやうはむこどりかぐを給へばしうひき。
もくなくやありがたん。左のおとゞきめづらしうて
かう人の御おぼしもくせたり。冷泉院ぐまて朱雀院の御
まゐるまゝせのそ。いまはやつ給しさいまそ
みちみやとえさそまかり給しげうきてまいて

ひともゆるされぬ柏木ひろひよりしやとの給はく
これぞ宮はれげまどおぼしまそづしうて御いらく
もえしの小侍従三日の夜も大殿つよりもらしめて
しれさうまれんとせまちすさせ給へは人でけいし
また御ほをごとのそ。そのびやゝちれどかれはどん
ずいぞん。車ぞひとねりらどまで。ろくのかず。
それかどのことはわてしごとれやうまぞあり
かう紫てのちはそのびくはまいり給。紫の上のうち
まはるをわせれらうさいかし大将へ海の事をおぼし
てひらそ御ともおかさかしなずめくうしてから
是はむかりまいそぎまいり給もなりつれん

此まいを抱うくをしうつして海にてさせよそてまつ 女三と三条宮一

らんことをぞおぼしとをきてける。母宮はいとう 女三ノ

れしきこともおぼして・おりしまず寝殿(しんでん)をさ 詞

まておはしまりおなべくの御へだいとうるはしけ 薫詞

かりむとそはれんぞうるおひなほらうとい

名てうくらを御おしおもてまうろひ御へなおあ

まひんがし此薫どもちどをやなてのちうは

らしくはうらしくあら海かしきよいよくみ

づさそへて・こまゐはあつくせなふかうはれにこる

づひと・今上うらほもさうしめしてかどちてうらと

けうつらひ御かんといふとおぼしちみど 此

とあゆれど心のやみはおぼつかなくてとまちんおはしま

しかうかう・母宮はいとはもとまはれつつひおかりかう・はかなきこま 女三 今上ノ

をおぼしとをのこなんあれしさせおもへりな源

朱雀院のそりわうてこれおまうおれてとどめ

みきてしとうを御しうべうく世とともにぞき御へまゐりど

おとろへず・御まはでとも此おはせず・さうもさを 女三ノ

御へとるどいう・いとなつかしうすこさてめしつれ・御よう 今上ノ

いかにアたう・うくやむごとなきすされにつろぞそとう

うるみまうぞうりもなくもてなしづきさはうれ御

おもぶつしさをいかなるあらむ・こころのうち 薫ノ

まハづとよまうれしくなえて・るをともすれどうち

なかめつゝ。宇治の寺つくらするぞいかゞと仰。宰
のかゝざこれはよそなり語白らるゝとりのて。それ
もちおれはそでさをふよりれて。ご抽ひまりこゝろど
までらいれて。世のつねおゝべてまハおもふずとれ
かしこゝろざしてちぎん。志つん。志ろゝ。こかれをも
どみちくれきはくもはとおほくめしきかう
もせのへバ。われとてらしとさ海ぐれてくもと
志ばめり。枝づらよ。例の家はおほしおきぬひ
まゝおかしうち心のなしまやおもん。は海すくし
ともくさくやむごとあげなるゝしれきんそひま
うとて四。今ハきりちよむつくらしすゝろご

とるぞハおもひまゞれ語みらんとふやすくて
たいめしのまへり。されどありしちかられ氣色の
まづ酒ぐるて心もいしぬまかしらひはそ。そひの内
かなる抽まてゝそと世をしのへへらべく御ゝすのえちん
ましりゝたらとおいぐちあるくてうれへ語いゝをある
海しきはなとられ。人もてゝそよのづらの内のうちを
もちきて侍れるどれのゝまへどらバかりめぞさげ
あるゝるゝ。ともまもあるぐさ海ず。われゞてうおぼし
語らんらんかりよし。哀をとゞろてし語よもくろうすを
あいずしひ志うれ語。おのを。ましかゞとくちおしう
おもひ出をゝこしあへど。それも我おりさ海のやうよ。

うしやとちかくおとらしむべからずなからし。おもふごとを
みするゆへにこそ世の人めでしきことどもありまじから
ならとおぼゆるまゝにいとゞかれうちとけそて
やさきんと。おひのすへりしれんをこそいちぐせと
まどもくしりおりぞられ給。ワが君とせちまゆし
かりそてし毎まの人ハ。けんどちつらしかれど。何かハ色ぞそ
どれおもあらん。まりちるさきをひとひまつるそ。うら
みらるゝよりかるは。いぶぞこの人のはこゝろま毎ハ
ドとおぼして。らけのいとどもかくもいへ御給
とぞ。めみそしてさしいぞさ世毎まへり。ほしたる
ことなれど。よくげなるらむやハ。ゆしきまでおろし

ようしうて。なのやうまゝ物語し。うち己ここ給へ御か
ほどうるまゝ。ウがもみはてとまほしうましくやましし
きも。世の物おもとあるれがくそらりぬりまやわらん。
いまでどいふるひあるくなり給まし。大ひとのよれつる
の有さ海まで。かやうるらんひとともとどめをさ給
へくましうがとのこおもかして比はびおもぶ女二ノ宮てさげるゝ
はあゝりまいゝつしかるどハおもひぬるそ。はまらす
べきすこさ君のはんなめれかくめでたりねぢけく。
ま◯びるまこてそいとおしかれ。さつワろびるは
なるん人へと。今上こゝそみちらワきせちよちつづけく。
むつび給べきまもおゝど物と。海しとしはつる

ご後の院ころまでなるとこそかめやもくまの
給けめとぞし給ひ侍べきげにいとおかしかりけれ
此どもなんど給へりも故あれば述いまうりに指紀など
うまやりまでし給かども皆ぬればこころやすく
侍とぞすまなるすまうしましくさとも今よりはおほゆれはお
げく出給ぬおほしみひとの御わひやおもいつれ
ばならいかやうに鳥をもみてぬべくめりなどは
ぶらひしがうまうさき人よりも家よをしば三条の
家なるこどうくてまなりぬべしとさだめて四月
ついたちごろせちがんとりいなるまじうをきささ
きよわらしまうぬおもとそのひ藤つぼに人

ゆるしを給て藤の花のえんをさせ給てるとれは
まーのこれおぼそてはいしこそいふおほやけわざ
をておほしのみやれつりまうりおもまへあつる。
上達部殿上人の饗なとにくちづきさりつりつま
つれり右のおとど桜案の大納言藤中納言右兵
衛督みとしちは三の家ひとつにて家なとさまひ
給ひるまれ庭の前のもとに殿上人の座を
まうけりてつらでんのひんがしまぐさこうれ人で
めしてられゆくゆどまそうてう吹てうへの御前
をびま家の御かうりは殿上にもかえるとはいつ
させかすへはおほくさとえじめなりておすかへまそりつ

つまりの絃、蓮華王院のほうざうにおさめて、入道家
まなしを絃しそうんのふ二巻、あまたの様まつけたる
と、おほとくきりめてそうし絃つきさくまたせん、さうり
のはてとびハ、かげんあまど、朱雀院の物ども、あまたあり、
笛ハうれ篆まつゐへしいましへれうきみのとある
あるさ物の音なりとめでさせたまへれバ、これおかりの
きうらうり、又ハいろ久らえくだ志をきつかすでれおる
むとおぼしくて、そうで絃人、何るあり、おもひかで
ん、三宝琵琶もりくまかふ、おほれれ比笛ハ、ひふかぞせ
まをすさねのうぞりハ時ゝそて絃なうし、蘇上人の件ま
もさうりがまつきおりしぬ、ぞも八めし出つゝ、いとゞ

もしろうあそぶ、家の院まさきよう、かずくまいりて絃
だんの御しるさ四、わきそんれこうつまかずらのむしうでれ
うちとゝきは、おりえずぬひらうきこゝ、五のやうだ
ありのほさうづるさ、庭のゝハ、ごん宿りなり、哥講讃
はまらちかひつりまいり絃、院さう月まいり絃り、
おほくおさかりてはびんちまうへしいやしきちの院
中まちのきこゆべきもおほせねバ、おほせはゆゝしきさ
そし絃をまちうりつかんど、院気色もいとあり
けん、院ましづきまかぞそなしとの絃へめこは
づひもてなしさへ、例のおもやげどもあれど、ひと
まくぞゆうそ、めふハいとゞみなしきへそぶまや

おんさしゐしめけりてかくうしろめたく
なれどいとこころひなし。さらうれみなくちおとゞ
たちの御ありけるよりぞかくさるなるを。これは
ましてはむなしくて。やさむきてまつり給へ
ば。はおぼしなるかとはじめいさようきこえ給れば
くちをしかりし庭よみけりつる給ふど。心ぐるしときまで
なんきこえける。おほち（紅梅大臣之）大納言ハ我こそかしこのもと
むとおもしが。ねたきのわざやとおもひ給へり。これ
〔廿二〕かやのはる（なつかし）女はもぞ。むかしこころかけたりしかの
へりなるさど。まゐりてのちをもおもひしるれば
さ波にまなくしうぶりしあそびし給てさて〔廿三〕のとえ

なまらんのこゝろつきさぶらひければ。はらからしうとのゝむ
ろしさもうしやけしきど。（今上ノ）みかどしめしたまつらへ
ぞありまかれば。（紅梅ノ）いとこゝろやましとおもひて人がらは
けにちなどかりことなれど。ちかう時のみかどのかく
おぼえろくさかまそで。むつかしうづきし給ふべきさま
うあしくしうとくのへのうちはおもしまれ殿ち
き給ひて。うち人乃うちとけたるへひて。かえてハ元〔廿三〕
んやなまやとまてさはかなるハなどかうしう
そしまつぶやきかしけれど。さすがにゆるしたれば
まいりてころれうちまぞそらつかふちの給ふ。かゝく
さしてあかまなう。かんざいのまとまうりつ。とく

ほどのかしこさハ。世のくまなきが御座りけれど
（地）御乃いとまあやしげなるめのとかけんとおもひ
や進バあるだちまことなるもさぶねかずかみのまち
をよらうとてはくちつきさどもいことあるすえて
ざめれど志かしざりとてひとのかうぞとひき
きさらし。これハあねの君乃おりてはくざしおり
てまいりはへりけるとき
（甚）あべらざきのえぶしはおもくかぶれ花をまがね
えざま袖かけてござり。うけござりけるぞおくきや（地）
（念）よろげ世とかけてまいらん花あれバかふとも
かかぬ色とこそされまことあれとき

（主人命婦）君がこゝあおね家かぶしハむかしさきれ雲有り　一五七
まとめぬさるれなしきり
（紅梅）よれつ子の色ともうしず雲のまでこち乃
がりける蕾なきみれかれ。これや。これいしぶら。（紅梅）大納言れ
なまかんとこそさゆれ。さへハひがことまもやあり
かん。かやうまことなるおかしきかしをあくのこぞ
あるりし

其かつらまはおもびいとおもしろし。大将の君
はおほかたとうちひさしばかりぞありちかくめでさ
し。按察（紅梅あぜち）も若きずれ給へりし比よりのちかくなりぬれば
はまもいともれくをとしてうちあはせなり。左の大
将の殿の君七郎ぞはまでその中之むくいところ
うしかりければ、御ぞ給はす。おほぞ給ひてかへりし
給ふ。おほつきちかくありてあんくへしを給ひけるちなど
もみんぢちめ。みこうちまいては人へりなりけす。殿上人が
くそれ人でまいは家の御くらよりをしれぐまなりけりそれ
かかりなん。家まぞてうせなり給ひけるさし此いとん
ことなりうへの女房ぢやうちは事をりつかうまつるを

給ひける。ひさしのは車まで、ひさしあるさいとげ三
びらうげのこがねづくり六、あじろびらうげ女あ
ろ二。女房三十人が内八六もつ人へ八人づつあをめ
まおさしきへのいだし車十二。なんぞ二の人でのせて
あんありけるはとくりの上達部殿上人六位あせ
いふとありあるよしをつくさせなへりけり。かく
て心やすくうちとけてみまり給ひ。いとおかし
げまおはしまさずやうなあそてまをやうやそてくて
いとうれしとところちなくおかしすれべすくせの程くち
おしかりけりと、こころとどりとへ御抱かる。
すさうしくるるのよすしれバうかあかちるをま

ぎゆくおりおりかく地の言葉しくおかかゆれべくこれ世
まそハなぐさめ□つべきさわざるありやとけよ
ちりてこそハおやしくつらりちぎりの程を
何のむくひとかさしめておもひきれぬとおもひ
ひつじ寺のいそぎさまのこころをつれのへり胃のきれ
まうちあざさはりしき御ど見して出よ日のかど
お例のうちへおもしりうくしを給ふぶすみのて
すべきことどもをとさその給ふなどしてさて出いの
給ひ来ヘ弁ノ名を云之
くち来のりとどと給ひすぐさんがある浅あられなれぞ
そちるさぶ海よおりかするまゝ女車れてとくあさ□
ませいあるぬひとつ河あるあしこきめづまおとこの

うま地ぞつりあまるさぶりして出もんかすおおく
これもしげるるもしれるそくかしるりいまわるり
くわこゆ

ゐ中びたる物からとみ給つゝ。殿（芸）ハまづいり給ひては
前どもゝあるどもハまゞさたちさわぎ雅まび車を
これ家をうしてくるありくるとこゆ。ハ随身（ずいじん）どもを
がやぐといふをせい（芸ノ）し給てなの（詞）まぐへぞとせ給
へバ、ゐ中うちゆがミたるもの、ひたちのぜんじ殿乃
姫君のくつをれハ寺まうでゝくるなり。
はじめもさてまうでんやどり給へりしと（芸人）まうす
や。さてしへ人（芸従人詞）なりとおぼしいでゝ、人々どもバてとう
まろくし給て。とくや此車いれよ。こゝまうでひと
やどり給へど。おもてまなんといハせ給。此（芸ノ）そを
の人もこなりぞめすぐてまてとくしう

ぬすびとなどもあれど。ゐはけらひやゝあらうじの
づゝりしげなるそでちかしまざるをひきさげなど
しつゝうしこまりつゝぞゐる。車ハ(うき舟ノ)いれてやらう人工
しのつまなぞよそする。これたん旅ハまだあしはま
てすゞれをくけど。おろしこあつる中の二まうり。
毎そべづそてたうきうじれわるすめりのぞき(芸)給ふ
ざれあれど。ぬれぎさとさてみるとうしさうしぬつさ乃
うぢゆりともそてがおゆらすゝ。そちこそ(うき舟)もおりぞ。(弁)はま
君はあうそこしてうくやんごとなげ成人のお
んなうと。これがあるばはあるいするたまうべし。君(芸)ハ車
とそれとえて路へ侍より。ゆめそれひとはまろ

一九土

ありとの給ふとおぼ川ちがさめさせ給てげれど。
こなたさ心えてさやおりさせ給まへおらうとハあれ
しうまへど。さとくゝはなんといえせうら。(うき舟ノ侍)けうさき
人のあ給。まづ川おりで。(車ノ)すゞれおけぐめりけ前どまれ
き侍らりハこのおりとあるれてめやすし。文おとなび
う侍人へいまひとりおりてぞやうといふはおやき(うき舟詞)
くあらハなるらちしそすれといふしま。おのゝあれ
どいとはてやうま御(侍女詞)の給ことごろこハける
ざうさもおろしこあそのこそハ侍あれざそハ文
いづくのあらうへきさうと心をやりていふ(うき舟)川ま
しげなおろしとこれが(芸人)まづうしらうきやうたいか

かやうにおそなる給ハいとゞおもひそへ（大将殿之）られぬべし
あふぎとつゞきしくしられバうぢハえしぬ給ひける
まだあくても也うちつゞきて見給ふ車ハたゆく
おもしろハくもりたるとは人ではやむごとなきにおもり
あしつるといと（うきふね）くるしげにやみえてひさしく
たりてめぐりいつゝこゝろうちさむおぼえしつとだ
ばしさかそあるがうちあへいろみこゝろちきこえたり
四尺（しやく）の屏風（びやうぶ）とこれそうじまそへてたてたるが
みちゆらあそれバのこるべくもあらずこゝろ（うきふね）
とがうしろめさげにおもひておもさぶ侮ましきそ
おぞひかすぬる。（侍ノ女詞）まもこゝろぐるしげにおかしきまゝ

つゝれハうぢ河の舟ハてりまさりまさりけれバいとおそろ
しうこそありつれ、この二月ばかり氷のすくなうし
ひがよくなりたりけり。いそぎやありきハあづまぢと
おもへバいづこもおそろしくむかしおぼえてうちして
くるしとも思ひさだめずひぬべきま。ことしげ（うきふね）うれをとらせ
でひまなくうちひきとさしのでゝうろが、まちら
うまおかしげなるかども、ひくうち飛ちどいふべくもみ
え（ぶ）まかしとてまあてあるり。やう（業ノ）くうしいうさきまで
さちすくみおへど、人のけぢひをどとそおどう
こうでら給よ。（侍ノ女詞）ワくさんおかうだしや。いらじき
かうれくこそすれ。おまへ（并）君のまさ給まやあらんと

いふもいふ海ひとりの女。げにはなはだめでたき御ものや。
京人もあるいはこそそこやびはいふ海めかしけれ。
天下はいつくしきるすとおぼしけれど。あづま
そだちのかたきものゝうへあはせ出給はざりき
し。これ尼君のむすめなりくいでうけるはおはすれ
ど。おうぞくのおしまほしう。およびも色あるさと見
せ。いと思ふよしなぞあはやなどかあめなり。あなか
しこれすのこよりわらはさそて此ゆるどまめて世給
へとそおしきどもとりつぎてきこえいひくさ
ものよりよせなどしてものけ給なる。これなどれ
こせどおぼろげばかりしてかりなどやさしの

御まや。おもしろくところもきゝてあはぬなとはいふなる
らいらくてきずきなへど。文ゆかしくありつゝなを
こちよりく給ふ。これよりまさりつゝされ人々を
きさいの家をもちはじめてぞうしこまてうちよ
れも心おそあるをもてらおくまでえあらしあ
べきれど。おぼろげなうしては。めでたんもとでまち
ず。おまり人はまどうゆくまでもれし給ふ徳ん
ちまぐて。いまはおのまどかりすぐれてきゆるとも
あるき人あれど。うくこちさりがたくおもなちろう
ゆかしきも。いとおやかなき心あり。はま君はされ慈
の流うるみも流をう。そこまさでしいぶしこちされど

（薫ノ）心ちもやましとて今の程どうちやすませたまへる
かりとはともれんへごころもちひていとひかりられど
この君（うき舟）をたづねまほしげにおぼしのたまひしかば
かゝるついでにもいひふれんとおぼしまうけて
日ごろしたまふやとなどてかくのぞきたまふらんとは
しらず。例のこゝろのあはれがりどもみまほしかる。また
ごやおはすやとこゝろくゝまでもいれさするを。あげまくへども
まもくそせちなどごとどもをこなひなどさそうち
けさうじて渡（うき舟之）らうとのくさまぞさうち。（弁ひ事之）おもひあつかう
ぞくげまいとかげらうかそて。こめきる絶えうしくし
くさうげまぞおる。（弁羽）さうのふおりしつゝなんとまち

きこえさせしを。あなどうかふま日さけていといふめれ
ば。老人いとあやしうくすしげ（うき舟ノ）なのことをはゐせたまへれ
ど。さのふいこみいけこ河のわたりまでまゐりて。げにま（うき舟）
しごまはれんちゝあらひてあそいふへておこさばい
まのぞおこさぬうろう。（弁）何ま君をとぶらひて。そゞろころうる
うるらゝめ。（薫心）これよりはいとよくこゆ。おうとまいと
よしおろまあ兄のわど。うんざしぬわぐうられ（大夫）をも
むかしくつくづくとしもみあはざりしけれう思ふれ
ど。これ（うき舟）をこゝろはつゝみて。さぞそれとをひせうるゝま。
例の涙おちぬ。（弁）おま君みいへうちあゝこ恩けいひ
のかれみるれど。家の中（中）かくみもいとよくまてると

さこゆ。哀なりける人かな。かくてもたかきもいかにをもいまつて
さづねもせでゐしけるよ。これよりくだりおし
うらんさいれしるらんゆりまでぶま。かどうかよ
ひさきてしらん人をこそはるかなるおもふまじ
きんちするまましてこれは志られてまつらざり
されども海ことは故宰相の住子まことそはありけれと
こまりし給てはかなかりけるあはれまうれしくおぼえ
給ふで今もなひよりて世中におもしろきまも君とと。
いひなぐさめまほし。かうらいまでさつみてかんざ
しはかなかりとつたへてこえすさんみかどは。ちかいと
けぶをうりそん。これはことへなれど。なぐさめ所あり

ぬべきさ海なりとおぼゆれば人にちかづかれおかりし
たるにやあらん。尼君は抱かかりすてしきそとくいり
ぬ人のとがめつるかありとちかくてのぞきしなるあ
てまとこころえてけれど。うちとけずもてなりけに
なりぬる奴べし。尼もくれまてゆけば。君もやをら
出て流ぞあれどさ給てぞれいめし出かさうじに
ちまおまへ君めし出おて。おりさ海あるとさひ給。おり
しまうれしくまりてこあひたるをいるまぞされ
実ししつとのの人は。志かおぼえをなす御し後はさる
べきつので得しいとまち得しまてぞはすべてに
二月まなすんで川をまうでのこまりまゐりいめんし

一九十六

て給ひし。これらく君をおぼしめしつかさ給ハ。かの（うきよ母ノ世之）
めりし給ひしかば。いとゞくやしく思ひけるきさき
はよろこびにうれしう給ひたれども給ひしかど。それこ（女二ノ宮之）
ろはひかのどやかなるもおぼしまさずとうけ給ひし。
おりびんなくおもひかへりこそたのむべくなども
きこえさせ給ひざりしを。又これ程ままぞうで
て。かくてりまへりけるあり。ものへりれ中やどり
まへらりむすび給ふも。うれ色あし。はけかひとらず
おぼえしらるゝゆへにあさん給ひあつかれ母君ハさそろこ
とにおもて。このさびハひとり抱し給ゆれバ。うくおそく（薫詞）
しますとおぼえ久しく抱し給はんとてこそゆ。お中び

一九十七終

うる人ども。よ。思ひやられつるありさまをきこえしと
て。うちながめられど。いかでおはしまさん。げにぞどもかくれ
おもひ。さていかにすべきさびしさを抱し給はん
こそ中ころなやすなれ。うく悲しくてなん。
まゐりたるおひたゞとつく給へりしもの給へバ。うち（弁詞）
つけまいらのかぎなきなれちゞさりけるかゝるもうちわる
ひて。さらバおもひ給はんとて。いかま
（薫）人目もなれ思もみえしまかりやとおぼげ
さて。くもぞ。まづめづ。うちはずさきのやう
まの給ひ。いろさりゆてあり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan